

修 士 論 文

ストーリー型学習の文脈と個人の文脈との 関連づけを促すアドオンの提案

～熊大 SCC (Story-Centered Curriculum) を題材として～

2010 年 4 月入学

熊本大学 社会文化科学研究科 教授システム学専攻

100g8812

竹岡 篤永

主指導教員	根本 淳子	助教
副指導教員	喜多 敏博	教授
副指導教員	鈴木 克明	教授

2012 年 1 月

要旨

学んだことを自分のものとするためには、自分の文脈に取り入れる、つまり、経験として学ぶ必要がある。しかし、これまでの学習経験を振り返ってみると、順序立てた説明をされているのに頭に入りにくい、あるいは、関係があるはずなのに教えられることが自分自身の課題と結びつかない、というようなことがあるのではないだろうか。学校や講座によって提供される教育カリキュラムは、学習者の文脈に沿うというより、どちらかと言えば、一般性、専門的分化、論理的形式化という特徴を備えている（デューイ 1998）。つまり、学習していることがなんとなく頭に入りにくいというような学習者の実感は、教育カリキュラムと学習者の学びの実情のずれから生じていると言えるのではないだろうか。

本研究は、このような問題意識から出発し、熊本大学大学院社会文化科学研究科教授システム学専攻で提供されている SCC（Story-Centered Curriculum）（以下、熊大 SCC）を題材とし、ストーリー型学習の文脈と個人の文脈との関連を見つけ出すことを促すためのアドオンの提案を目的とするものである。本研究では、学習者ひとりひとりに合わせたストーリー開発が現実的でないことから、ストーリーの文脈を変えることなく、機能強化を行うことを目指している。なお、提案するアドオンとは、あるソフトウェアへの追加機能を持つソフトウェアには限らない。補助的なドキュメントや仕掛けなども含むものとする。

まず、アドオンの開発指針を得るために、熊大 SCC の学習経験者を対象に 3 つの調査を行った。1 つめは、熊大 SCC 学習者が SCC を体験しながらその設計方法を学ぶ「統合型カリキュラム設計演習」に記したリフレクションデータの分析である。2 つめは、熊大 SCC 学習者へのアンケート調査、3 つめは、より具体的な学習方法等を知るためのインタビュー調査である。これら分析・調査より、「SCC を実務へ近づけるしくみ」「与えられた業務へ着目させるしくみ」「同級生（同僚）と関わるしくみ」「SCC に慣れるしくみ」「ペース配分をきめ細かく行うしくみ」というアドオンの着目点があることが明らかになった。

これらの観点をもとに、「熊大 SCC への準備を補強する」「進捗管理を支援する」「共有へ取り組みを促す」という 3 つのコンセプトを作成し、「a. 季節の行事」「b. 出社・退社・休憩中などの表示」「c. 週報と社内ミーティング」について、具体的なアドオンを提案した。これらは、コミュニケーションを均等に配する機会を作り、また、コミュニケーションを活性化することをねらいとしている。これらのアドオンは、ストーリーの文脈を変えることのないものであり、さらに、ストーリー学習が提供する文脈と個人の現実の文脈との関連づけを促すことが期待できる。

本研究では、熊大 SCC 学習経験者を対象とした調査からアドオンの提案までを取り扱っている。今後は、アドオンを使用し、その効果を確かめることが求められる。

目 次

要旨.....	iii
目 次.....	iv
1 はじめに.....	1
1.1 ストーリー中心型カリキュラムとは.....	2
1.2 研究の目的.....	4
2 文脈から見たストーリー型学習.....	5
2.1 GBS の 7 要素と文脈.....	5
2.2 ストーリー／シナリオ文脈を用いた学習例.....	6
2.3 SCC における文脈の役割.....	7
3 熊大 SCC の学習経験の調査.....	9
3.1 リフレクションデータの分析.....	9
3.1.1 2010 年度学習者データの分析（予備分析）.....	9
3.1.2 2010 年度・2011 年度学習者データの分析.....	11
3.2 熊大 SCC 学習者へのアンケート調査.....	14
3.3 熊大 SCC 学習者へのインタビュー調査.....	19
4 アドオン.....	25
4.1 アドオンのコンセプト.....	25
4.2 アドオンのラフスケッチとそれに対する意見.....	26
4.3 アドオン案.....	27
4.3.1 顔合わせ花見会（〇〇会）.....	27
4.3.2 出社・退社等表示.....	28
4.3.3 週報と社内ミーティング.....	29
5 研究成果のまとめと今後の課題.....	31
5.1 本研究の成果のまとめ.....	31
5.2 今後の課題.....	32
参考文献.....	33
本論文関係業績リスト.....	34
付録 A リフレクションデータ（予備分析）.....	35
付録 B リフレクションデータ（2 年分分析）.....	38
付録 C アンケート項目と結果の詳細.....	52

表 目 次

表 1.1	熊大 SCC 学習で想定される「困難」と「解決策」	3
表 3.1	熊大 SCC の選択時期	15
表 3.2	就業経験年数毎の人数	15
表 3.3	熊大 SCC への期待	16
表 3.4	熊大 SCC と似た学習経験の有無	16
表 3.5	熊大 SCC と現実の仕事との類似点.....	16
表 3.6	熊大 SCC と現実の仕事との類似点（近くに感じられたかどうかをキーに）	17
表 3.7	仕事での一般的な課題解決方法	17
表 3.8	熊大 SCC でも仕事での一般的な課題解決方法と同じ方法を取ったか.....	18
表 3.9	熊大 SCC と現実の仕事との類似点.....	18
表 3.10	熊大 SCC の印象（学習開始時と学習終了後）	18
表 3.11	インタビュー対象者・方法の概要.....	20

図 目 次

図 1.1	通常の科目履修スタイル（上）と熊大 SCC スタイル（下）	2
図 2.1	ゴールベースシナリオ（GBS）の構成要素（根本，鈴木 2005）	5
図 3.1	パターンで分類したデータを学習者別・リフレクションの進行に従って整理.....	10
図 3.2	2010 年度・2011 年度データの分類.....	12
図 3.3	熊大 SCC の科目の並び	22
図 4.1	「花見会」導入部	27
図 4.2	「花見会」イメージ	27
図 4.3	「出社・退社等表示」イメージ	28
図 4.4	「週報」イメージ	29
図 4.5	「社内ミーティング」イメージ	30

1 はじめに

学んだことを自分のものとするためには、自分の文脈に取り入れる、つまり、経験として学ぶ必要がある。しかし、これまでの学習経験を振り返ってみると、順序立てた説明をされているのに頭に入りにくい、あるいは、関係があるはずなのに教えられることが自分自身の課題と結びつかない、というようなことがあるのではないだろうか。学校や講座によって提供される教育カリキュラムは、学習者の文脈に沿うというより、どちらかと言えば、一般性、専門的分化、論理的形式化という特徴を備えている（デューイ 1998）。つまり、学習していることがなんとなく頭に入りにくいというような学習者の実感は、教育カリキュラムと学習者の学びの実情のずれから生じていると言えるのではないだろうか。

もし、このようなずれを埋めることができれば、例えば、学ぶ内容を自分自身の切実な問題として感じることができれば、あるいは、教育が現実場面での学び一失敗から、そして、達成から、あるいは、助け合い、わかり合いからの学びに十分近ければ、わたしたちは学ぶ内容をもっと自分の経験として取り入れることができるのではないだろうか。あるいは、取り掛かった学習を途中で投げ出すことなく、思い描いていたところまで学習を続けることができるのではないだろうか。

このような効果が期待できる方法の一つに、ストーリーを活用した学習がある。例えば、看護師が医療分野のストーリー設定のもとで学習を行う場合である。このような場合、学習者は学ぶ内容をより容易に自分自身の現実的な問題と関連づけて捉えることができるだろう。本論では、教育の中にストーリーによる文脈を持ち込んだ学習をストーリー型学習と呼ぶことにしよう。

しかし、例えば、プロジェクト管理を学びたい IT 技術者が、医療分野を題材としたプロジェクト管理のストーリー型学習に取り組む場合、看護師が同じものに取り組む場合より、おそらく、より大きな難しさを感じるのではないだろうか。学習者の現実世界と提供されるストーリーとのギャップによって、学習者がそのストーリーに入り込めない場合が考えられる。そしてそのような場合、ストーリー型学習の効果は、提供者が想定しているほどではない可能性があるのではないだろうか。

また、限られた経験しか持たない学習者（例えば、学校での学習生活とアルバイトとサークル活動の経験しか持たない大学生）に将来役立つ内容を学習させたい場合、その学習者が現時点で持っている文脈にぴったり合ったストーリー型の学習は構築しにくいだろう。つまり、学習者の現実の文脈にマッチした学習ストーリーの構築は、いつでも可能ではないと考えられる。

しかし、現実には、ストーリー型学習の文脈と自分自身の現実の文脈とが類似していなくとも、それらをうまく関連づけて、学習内容を自分自身の切実な問題として感じ、うまく学習を進める学習者もいる。異なる分野で学んだことを、現在直面する問題にうまくあてはめることができた、というような経験を持っている人も少なくないのではないだろうか。

本論は、学習者が現実持つ文脈に必ずしも類似しているとは限らないストーリー型学習の文脈を、ストーリーの文脈そのものは変えることなく、よりいっそう学習者本人の文脈に関連づけ、学習者がそのストーリーを自分自身の切実な問題として感じさせる仕組みについての考察である。

1.1 ストーリー中心型カリキュラムとは

本論は、ストーリー型学習の一つであるストーリー中心型カリキュラムを題材としている。そこでまず、ストーリー中心型カリキュラムの概要とこれを題材として取り上げる理由について述べる。

ストーリー中心型カリキュラムの概要

熊本大学大学院社会文化科学研究科教授システム学専攻は、専攻が開講されてから3年目の2008年度より、ストーリー中心型カリキュラム（Story-Centered Curriculum 以下 SCC と記述する）と呼ばれる学習カリキュラムを提供している。教授システム学専攻ポータル内に設けられた「FAQ」では、熊大 SCC¹を、「学習全体にひとつのストーリー性のあるシナリオを導入して、そのストーリーに沿って学習を進め、課題をこなしていくというもので」と説明している。さらに、学習者が内容の異なる科目を同時に複数行うことは容易ではないため、「科目をそのストーリーに関連付けることで統合的な学習ができることを目指す」としている。

教授システム学専攻に入学を許可された学生（合格者）は、1年次前学期の学習を始める前に行う「オリエンテーション科目」で、下図を参照しながら、熊大 SCC について次のような説明を受ける。

「〔熊大〕² SCC を選択すると、毎週受け取るメッセージ〔ストーリー〕に沿って学習していくので、ひとつの科目に集中し、一定のペースで学習することが可能となり」そして、「毎週締め切りに追われることとなりますが、学習を確実に終えるためのペースメーカーになります。」

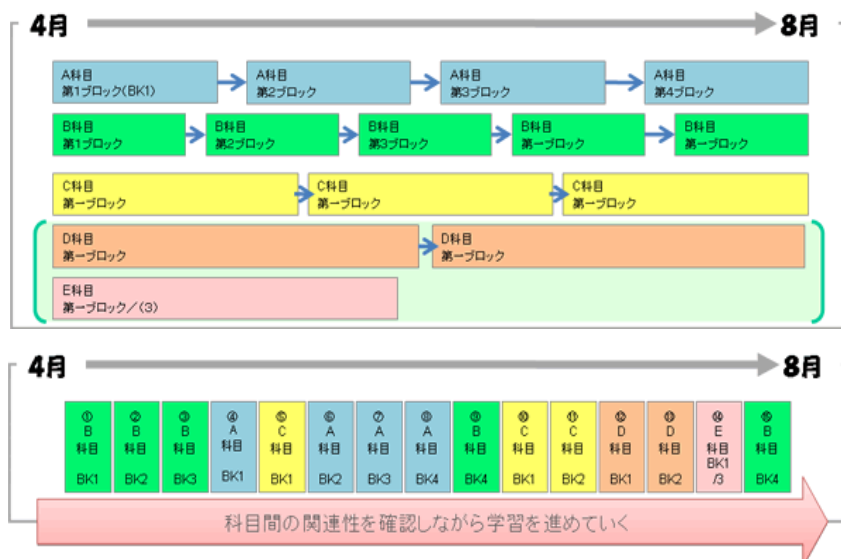


図 1.1 通常の科目履修スタイル（上）と熊大 SCC スタイル（下）
（2010 年オリエンテーション科目より転載）

¹ 熊本大学大学院社会文化科学研究科教授システム学専攻が提供している SCC を熊大 SCC と記す。

² 以下〔〕は筆者の補足

熊大 SCC は、ほとんどが社会人である学生が、多角的・実践的に「教授システム学 (Instructional Systems)」を学べるよう設計されたカリキュラムである。学習者には e ラーニングを主力商品とする教育ベンダーである MTM 社 (Meet The Mind 社) に中途採用された社員という役割が与えられ、教材設計・e ラーニングシステム操作・知的財産権の調査など多岐にわたるタスク (各科目の小さな課題) への取り組みを通じて、部長からの業務命令を達成していく。

ストーリー中心型カリキュラムを題材として取り上げる理由

教授システム学専攻では、修了すると身につく具体的なコンピテンシー (職務遂行能力) を挙げ、それらコンピテンシーの獲得を目指すカリキュラムが組まれている。熊大 SCC のストーリー自体もそれらのコンピテンシーの達成を目指すものとなっており、具体的な出口人材像として e ラーニングの専門家を設定している。そして、このような専門家が出会うだろう出来事を想定したストーリーを提供している。

ただ実際には、すべての学生が e ラーニングの専門家を目指しているわけではない。また、e ラーニングにはほとんど関係のない仕事を持つ学生も少なくない。つまり、熊大 SCC には、提供する文脈と学習者自身が持つ文脈とが、うまく関連づけられるとは限らない、という潜在的な課題を持つのである。事実、FAQ には、次のような「(熊大) SCC 学習上想定される『困難』」が記述されている。

表 1.1 熊大 SCC 学習で想定される「困難」と「解決策」
(FAQ より作成。番号は筆者が付加)

	Q：想定される「困難」	A：提案された「解決策」
1	SCC 文脈と学習者の職業や経験とが異なるため、現実感がもてない。	「ありそうな出来事」の場を提供しようとするもので、疑似体験をして欲しい。
2	SCC の課題と科目ブロックごとのタスク内容との間の乖離を感じる。	SCC の課題は、SCC のために特別に作ったものではないため、課題とタスクとの乖離は科目自体の問題。
3	SCC の締め切りに合わせるのではなく、自分のペースでじっくり勉強したい。	SCC のペースで学習すると遅延が減少する。後期にはグループワークが要件になっている。
4	SCC に払う時間的・精神的コストに価値を感じない。	相当の時間的・精神的な投入が求められるが、社会人が「明日の仕事にすぐに生かせる」と感じられる価値を含んだ中身を伴うものである。
5	SCC の中に履修済みの科目の課題があるが、再度回答する必要があるのか。	再度作成しなおす必要はない。改善したものを再提出することができる。

これらの「困難」は、例えば、表の番号 5 のように、前期 SCC には修士 1 年次のすべての科目がひも付けられているという熊大 SCC の設定自体から生じるものもある。しかしそれだけでなく、例えば表の番号 1 では、学習者が熊大 SCC の文脈と学習者自身の現実とを照らし合わせることによって生じるだろうと想定される「困難」が挙げられている。熊大 SCC は学習者が自分の文脈とストーリーの文脈とを照らし合わせることを想定していると言えるだろう。

ストーリー型学習が、学習者ひとりひとりのニーズに合わせたテイラーメイドでな

い以上、ストーリーの文脈と学習者の文脈との間にはどうしてもかみ合わないところが生じる。このようなズレは個別の学習者に合わせて作り上げた学習教材でもない限り、必ず生じうるものであり、熊大 SCC だけの問題ではない。そこで、学習者の文脈と学習教材・教育カリキュラムで提供される文脈との接合を探るため、熊大 SCC を題材として取り上げる。

1.2 研究の目的

熊大 SCC では、e ラーニングをより実践的に学ぶため、学習者には e ラーニングを主力商品とする教育ベンダーに中途採用された社員という役割が与えられ、部長からの指示により、多岐にわたる分野の課題に取り組む。この学習教材に取り組む学習者の文脈はさまざまであり、そのため学習者の現実の文脈が、ストーリーに“乗る”ことをじゃますることが想定できる。このことだけをとってみても、熊大 SCC もまた、ストーリーの効果を必ずしも十分に発揮できるわけではないという課題を抱えていることがわかる。それとは別に、ストーリーに“乗れない”学習者が、なぜ“乗れない”のかが十分に解明されているとは言えない。

つまり、ストーリー型学習で提供される文脈と学習者の現実の文脈とをうまく関連づけるなんらかの仕掛けがあれば、ストーリー型学習の効果がより引き出せるのではないかと考えた。

「何らかの仕掛け」の提案を大きな研究目的とし、その下位に、以下のような問いを設定した。

- ① うまくストーリー型の文脈に“乗れている”学習者は、提供されるストーリーの文脈と現実の文脈とをどう結び付けているのだろうか？ どのような方策をとっているのだろうか？
- ② うまく“乗れない”学習者は、どのような部分に妨げや困難を感じているのだろうか？
- ③ うまく“乗れない”学習者は、困難を感じたときにどのような対処方法を取っているのだろうか？

以上の問いについて調査を行い、その分析結果をもとに、ストーリー型学習が提供する文脈と個人の現実の文脈とを結びつけるアドオンを提案する。

なお、ここで言うアドオンとは、あるソフトウェアへの追加機能を持つソフトウェアには限らない。補助的なドキュメントや仕掛けなど、現状機能を強化するものすべてを指している。

2 文脈から見たストーリー型学習

ストーリー型学習には、どのような実践例があり、どのような研究がなされてきたのか。本章では、ストーリー型学習と文脈の関係について先行研究を踏まえて記述する。

2.1 GBS の 7 要素と文脈

ストーリー型学習理論の代表的なものに、ゴールベースシナリオ（Goal Based Scenarios）がある（以下 GBS）。GBS には下図のように 7 つの要素がある。

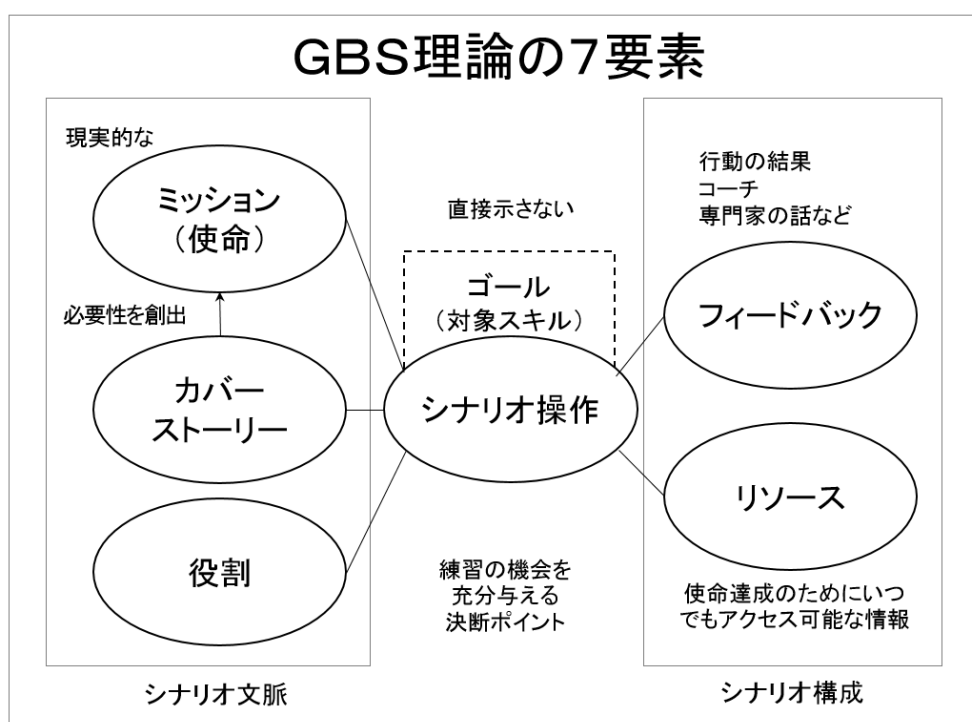


図 2.1 ゴールベースシナリオ（GBS）の構成要素（根本，鈴木 2005）

まず、これら 7 つの要素－「ミッション（使命）」「カバーストーリー」「役割」「シナリオ操作」「フィードバック」「リソース」－を、文脈との関連で考え、次のように整理した。

7 要素の中で文脈に関連するものは「シナリオ文脈」の要素である「ミッション（使命）」「カバーストーリー」「役割」である。ミッションとは、学習者に動機をもたらすもので、現実の生活に応用できるスキルを含む。カバーストーリーは、ミッションを達成する必要性を作り出す。役割は、必要なスキルを練習するのにもっとも良い役割であり、真剣に動機づけするものとされる。

シナリオ操作は、「現実的な場面の中で学習者がスキルを使い、目標を達成するために必要な関連知識を活用しながら問題を解決していく」ものであるとされる（根本，

鈴木 2005)。GBS 教材の中の「現実的な場面」とは、GBS で作られた文脈を指すため、シナリオ操作も文脈に深く関連する GBS 要素だろう。

「シナリオ構成」の要素であるフィードバック、リソースは、GBS によって設定された「現実的な場面」に対するフィードバックであり、リソースであるため、文脈に深く関連すると考えられる。

つまり、以上をまとめると、GBS 教材における文脈は、カバーストーリー、ミッション、役割によって設定され、リソース、フィードバックによって強化される学習駆動の枠組みと言えるだろう。

2.2 ストーリー／シナリオ文脈を用いた学習例

次に、GBS 教材における文脈そのものについて、具体例に沿って見ていく。

稲垣ら（2007）の小学生向け携帯電話モラル教材と小松ら（2011）の中学生向けの環境ゲームは、文脈の中にゲーム要素を持ち込み、ゲーム要素によって楽しく使命を達成できるように組み立てられている。

稲垣らは、小学生が楽しんで学習できる、あるいは感情移入を高めるという観点から、人間と言葉でコミュニケーションできる犬「モバ」を用いたシナリオを設定した。携帯電話やパソコンのような機器は、人によって使い方が異なり、それぞれの使い方に関連してトラブルが起こる。そのため、一人の主人公だけが遭遇する出来事をメインに据えると、発生するトラブルも限られてくると考えられる。そこで、トラブルを網羅的に、少なくともよく起こりうるトラブルについて学ばせるために、「モバ」というキャラクターを設定し、またそのことにより、小学生が家族の年長者にアドバイスをするという不自然さを回避している。

また、小松らは、環境配慮行動をすることによって進化する卵一かんたまーを創造し、これを進化させるというカバーストーリーを設定した。小松らは、この設定について「現実的な設定ではないが、この『カバーストーリー』により教材にゲーム性を持たせた」と述べている。シナリオ操作部分は、それにひきかえ、洗濯、昼食、空調設定、蛍光灯購入と、極めて身近な設定となっている。これら現実的な場面において、学習者には環境へのメリット・デメリットが情報として提示され、行動を選択する。

文脈に非現実を取り入れ、ゲーム性を高めたこれら2つの例は、知識を学ぶという点では効果を上げている。しかし、設定された文脈と現実の世界との結びつけについては、言い換えれば、学習者は学習内容をどのように現実結びつけているのかについての説明は十分になされているとは言えない。

梅田らの教材（2008、2009）は、高校生に情報モラルの判断観点を学習させるものである。学習させるべき情報モラルの観点を4つ洗い出し、GBS理論を枠組みとして学習させる教材を作成した。「友人と一緒にWebサイトを立ち上げる」ことを大きな使命とし、学習者にはパソコンが苦手な主人公の友人という役割を与えるという現実的な文脈が採用されている。法律違反や他人への迷惑、自分への被害などWebページを立ち上げるときにいかにも起こりそうな場面で、行動を選択していく。

朴ら（2010）は、大学生の情報活用能力を図るため、キャリア教育の一環として携帯電話事業者のインターンシップに参加し、その中で新製品の企画に関する業務が命じられるという文脈を設定した。これは教材ではなく、ストーリー提示や進行は生身

の教員が行い、必要な情報は LMS (Learning Management System) を活用するという授業形式で行われた。新製品の企画書やアンケートデータの集計・報告書作成、企画書プレゼン資料作成などを通じて、ワープロ、表計算、プレゼンソフトの技能を身に付けていく。

これらの2つについては、非現実を持ち込むことなく文脈を設定しており、すぐに現実に応用可能できるものとして学習が進められると考えられる。しかしながら、実際に学習者がどのようにストーリー文脈と現実とを結びつけているのかについては、明らかではない。

2.3 SCC における文脈の役割

最後に、SCC における文脈の役割についてまとめる。

Schank (2007) によると、SCC は、知識やスキルが統合された形で獲得・応用できるように設計された一連の現実的世界において、学習者が見習い（徒弟）の役割を演じる学習経験と見ることができる。SCC の成功にはリアリティのある個々の文脈が極めて重要だが、それらは一つのストーリー文脈のもとで、獲得したことを順に活かせるように組み立てられていなくてはならない。十分な情報を持つリアルな文脈は、その文脈の中で使われる知識やスキルの獲得を促進する。それだけでなく、一つのストーリーの中で広げられた相互作用はストーリー文脈を強め、また、獲得すべき知識やスキルとは関係のない、付加価値のない学習の必要を減らす。

また、SCC では、メンターが専門家の役割を演じ、学習者にフィードバックを与え、自分自身で学習を主導するように仕向ける。さらに、SCC ではチームでの活動が用いられ、それにより、互いに学びあうことや仕事を分担したり、人間関係を作りあげたりという現実世界の仕事のやり方を学習する。

以上、SCC による学習では、学習目標を達成するだけでなく、文脈により学習意欲を高めたり、現実世界の仕事のやり方を学んだり、といったことが促進されることがわかる。

3 熊大 SCC の学習経験の調査

熊大 SCC について、学習経験者はどのように感じているのか。本章では、熊大 SCC 学習者が学習と並行して行ったリフレクション（省察）、および、アンケート調査・インタビュー調査の結果を記述する。

3.1 リフレクションデータの分析

修士1年の熊大 SCC は、統合型カリキュラム設計演習という科目によって提供される³。学習者は、「ストーリー中心型カリキュラムを例に学習者の視点からカリキュラム統合設計の事例を体験し」、そして、「科目横断的な枠組みをどう構築するか、また学習進捗を支援し、学習成果の統合を促進するための仕組みをどう提供するかを体験的に学び省察する。」（「統合型カリキュラム設計演習Ⅰ」の説明を教授システム学専攻ホームページより抜粋）

科目の目標を達成させるため、一続きのシナリオ操作（1科目相当分）が終わる毎に、リフレクションが行われる。熊大 SCC 体験者がその学習方法についてどのように捉えているのかを探るため、このリフレクションデータの分析を行った。

3.1.1 2010 年度学習者データの分析（予備分析）

方法

まず、筆者も学習者であった 2010 年度前期データの予備的な分析を行った。分析対象としたデータは、前期熊大 SCC の対象である 5 科目についてのリフレクションデータである。5 つの科目の終了毎に 10～16 人が記述したもので、255 の書き込みがあった⁴。これらデータから、学習者が「学習内容について意識した部分」について抜き出した。具体的には、「ストーリーに関わりなく学習を進めたのか」「ストーリーに入り込んで学習をしたのか」という観点から記述を洗い出した。その後、抜き出したデータを 3 つに分類した。学習内容を外側から眺めるもの（パターン 1）、ストーリーに入り込んで学習したと考えられるもの（パターン 3）、そしてその中間に位置するもの（パターン 2）である。また、データは学習者別に整理した。

結果⁵

パターン 1（学習内容を外側から眺めるかのような）書き込みには以下のようなものを抜き出した。

³ 熊大 SCC には、前期はすでに紹介した企業のストーリー、後期は熊大へのインターンとなる大学のストーリーと、2つの異なる場が設定されている。企業と大学という異なる環境における出口人材を想定しているためである。本論は主に前期 SCC を対象とした研究である。

⁴ 10 人～16 人とバラツキがあるのは、途中で書かなくなった学習者がいるためである。

⁵ 分析対象データの詳細を付録 A に記載した。

- ・「SCC での学習の進め方が業務の進め方の参考になると感じています」
- ・「LMS の特徴をより深く考察することにつながったと思います」

これらは、自分の現行業務にいかせる部分を挙げたものや、自分自身の現行の業務を見つめ直したものであった。

パターン 2 (中間型) に分類したデータは、次のようなものである。

- ・「全体の進捗管理として SCC の流れを利用する」
- ・「部長に報告するビジネス文書なんだ、と思うと、スラスラ (?) 書ける私です」
- ・「タスクが、SCC の業務なのか、科目の学習なのか、それは地続きなのか、頭を切り替えてやるべきなのか、混乱していました」
- ・「ビジネスの分野が違ふとまったく想像もできないので、部長に確かなレポートを送ることができたかどうかは定かではありません」

これらは熊大 SCC の文脈を積極的に活用しているものと、熊大 SCC 文脈がうまく活用できなかったというものの両方を含んでいる。

パターン 3 (ストーリーに入り込んで学習) したものには次のようなものを入れた。

- ・「事例が提示され、それへの対応策を検討するという課題はやりがいがありました」

これは、熊大 SCC 文脈で与えられた使命そのものへのやりがいについて言及したものであると言えるだろう。

以下の図は、抜き出したリフレクションデータを科目毎・学習者別にプロットしたものである。

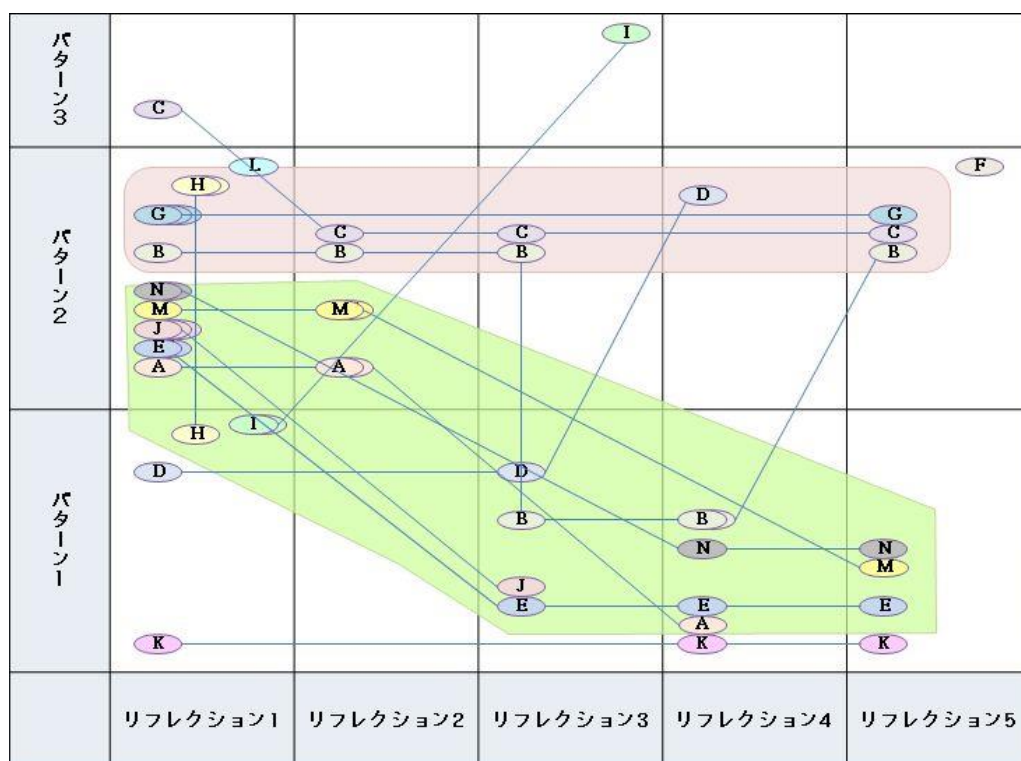


図 3.1 パターンで分類したデータを学習者別・リフレクションの進行に従って整理

上図の A~N は、学習者を表している。学習者はリフレクション 1 からリフレクシヨ

ン5の順に書き込みを行ったため、この横軸は時間の推移と捉えることができる。ただし、時間幅は学習者によって異なる。

リフレクション毎の学習者の分布を見ると、導入部分（リフレクション1部分）には、パターン2が多かったと言えるだろう。リフレクション1から5への移り変わりを見てみると、学習が進むに従って、パターン1（外側から眺める）に移行する学習者（A・E・H・J・M・N）と、どの時点でもほぼパターン2（中間型）であった学習者（B・C・G）に大別できた（前者は上図のピンクで囲った部分。後者は上図の黄緑で囲った部分）。

考察

熊大 SCC の作り手は、FAQ の番号1（表 1.1）にあるように、「ありそうな出来事」を提供することによって学習者を疑似体験へ導こうと考えていたのではないか。パターン3（ストーリーに入り込んで学習）である。しかし、実際には、ストーリーに入り込むという形での疑似体験をした学習者は多くなかったのである。学習者である学生は社会人であり、現実の仕事を持っている。そのため、実際に自分が行っている仕事と熊大 SCC で与えられる仕事とを、ついつい比較してしまったのではないか。つまり、業界内容等が異なるためストーリーに入り込めないというような書き込みとなったのではないか。

この点についてさらに考察を進めるため、2010 年度に加え、2011 年度学習者のリフレクションデータの分析を行った。

3.1.2 2010 年度・2011 年度学習者データの分析

方法

2010 年度データに基づく予備分析の後、2010 年度と 2011 年度のリフレクションデータを併せて分析した。学習者が自分自身の学習について振り返っているデータを改めて 227 個抜き出し、それらを分類・整理した。

具体的には、対象データをカード化し物理的に並べながら分類し、それをもとに、KJ 法ツールを使って分類・整理した。予備分析では、学習者の実際の業務との関わりを軸に分析を行ったが、2011 年度データでは、必ずしもこの軸には収まらない部分があったため、分類枠を拡張した。

結果⁶

対象データの分類・整理の中で、予備分析で見出した枠組みパターン1～3（外側から眺める／中間型／ストーリーに入り込む）を、「熊大 SCC（あるいは科目学習）が学習（や実務）にプラスになった点」と、「困難を感じた点」とに発展させた。図 3.2 の中のいちばん大きな囲みがそれらである。左側のいちばん外側の赤色の囲みの中は、「よい学びができた」というグループで、左側の黄緑色の囲みは「SCC に困難を感じた」グループである。この2つが、いちばん大きな括りとなる。

⁶ 詳細な分析対象データを付録 B に記載した。

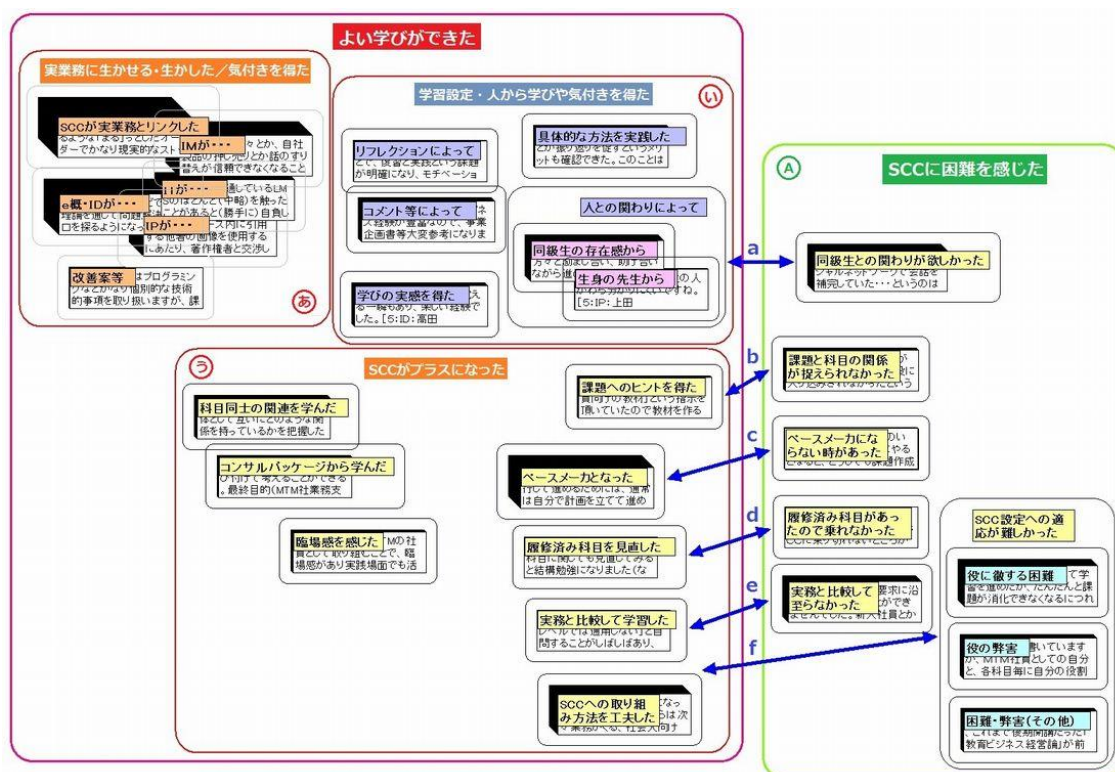


図 3.2 2010 年度・2011 年度データの分類

「よい学びができた」グループの中をさらに、大きく3つに分類した。1つめは左上の赤囲みで「実業務に生かせる・生かした／気付きを得た」というラベルを付けた（○囲みの「あ」部分）。この中に含まれるデータは、熊大 SCC から、あるいは各科目から実業務につながる学びや気付きを得たと記述されたものである。また、熊大 SCC が実業務とつながったものと、各科目（e ラーニング概論／インストラクショナル・デザイン I／ネットワーク上の知的財産権及び私権／学習支援情報通信システム論／教育ビジネス経営論）がつながったものを含めた。

2つめは、「学習設定・人から学びや気付きを得た」グループである（○囲みの「い」部分）。e ラーニングの設定全体から、また、e ラーニングを通じた人との関わりから得た学びや気付きをこのグループに入れた。この中には、「リフレクションから」「コメント等によって」「学びの実感を得た」「具体的な方法を実践した」「人との関わりによって」というデータを含めた。「人との関わりによって」はさらに、「同級生の存在から」「生身の先生から」に分けることができた。

3つめには「SCC がプラスになった」というラベルを付けた（○囲み「う」部分）。ここでは、熊大 SCC が実業務に直接つながったというもの以外のプラスの記述を入れた。まず、「科目同士の関連を学んだ」「コンサルパッケージから学んだ」という熊大 SCC 全般にわたる学びがあった。次に、「臨場感を感じた」という印象があった。その他、「課題へのヒントを得た」「ペースメーカーとなった」「履修済み科目を見直した」「実務と比較して学習した」「SCC への取り組み方法を工夫した」もここへ入れた。また、これらはそれぞれ、「SCC に困難を感じた」グループと共通点があると考えた。矢印で示した共通点については、後述する。

右側の黄緑色で囲んだグループは、「SCC に困難を感じた」という記述があったものである（○囲み「A」部分）。これをさらに6つのグループに分けた。「同級生との関わりが欲しかった」「課題と科目の関係が捉えられなかった」「ペースメーカーにならない時があった」「履修済み科目があったので〔ストーリー〕乗れなかった」「実務と比較すると至らなかった」「SCC 設定への対応が難しかった」である。最後の「SCC 設定への対応が難しかった」は、さらに3つにグループ「役に徹する困難」「役の弊害」「困難・弊害（その他）」に分けた。

以上のようにグループ分けし、「よい学びができた（プラス）」と「SCC に困難を感じた（困難）」の関連について検討した。図の中央部分の a～f を付した青色の両矢印は、関連があると考えられた。それぞれ次のような共通点があると考えた（下の a～f は図の a～f に対応）。

a) 共通点：同級生との関わり

〔人との関わりから学んだ〕 ↔ 〔同級生との関わりが欲しかった〕

b) 共通点：MTM 社課題と科目タスクのつながり

〔課題へのヒントを得た〕 ↔ 〔課題と科目との関係が捉えられなかった〕

c) 共通点：ペースメーカー

〔ペースメーカーとなった〕 ↔ 〔ペースメーカーにならない時があった〕

d) 共通点：履修済み科目

〔履修済み科目を見直した〕 ↔ 〔履修済み科目があったので SCC 〔のストーリー〕 に乗れなかった〕

e) 共通点：熊大 SCC と実業務との比較

〔実務と比較して学んだ〕 ↔ 〔実務と比較して、〔実務の仕事の達成度には〕至らなかった〕

f) 共通点：熊大 SCC 設定への各自の取り組み

〔SCC への取り組み方法を工夫した〕 ↔ 〔SCC 設定への適応が難しかった〕

以下に、いくつか具体的な書き込みを挙げる。

「a 同級生との関わり」：

- ・「確かに、一体感がありました。特に課題をそれぞれの同期〔生〕が同時期に同じ学習をするので、双方向性がより密になっているように思えます。」（プラス）
- ・「現実の社会で納期に遅れそうであったり、求められている期限に遅れそうな場合は、上司に相談したり、するであろう。ここでは MTM 分室を使えばよかったのであろう。しかし、私は上手く使えなかった。」（困難）

「b MTM 社課題と科目タスクのつながり」：

- ・「中村部長から『新入社員向けの教材』という指示を頂いていたので教材を作る際に、漠然と考えずにすみしました。」（プラス）
- ・「一つ心残りだった点があります。それは今一つ役に入り込みきれなかったということです。目の前の課題をこなしていくので必死になってしまってそこまで余力がなかったのかと反省する次第ですが、これには SCC と各科目とのつながりが一方通行気味ということもあったかと思いました。」（困難）

「f SCC 設定への各自の取り組み」：

- ・「後半は自らストーリーにつかるぞ！という気持ちで取り組みました。その結果、ストーリーに乗ることも徐々にできるようになりました。自らストーリーに入っていくという気持ちも重要だと思います。」（プラス）
- ・「このストーリーで出てくる信頼関係というのは、どこか『じゃ、君、やっとい

てね。頼むわ。』という丸投げ的なストーリー展開のように感じられました。」(困難)

考察

「プラス」と「困難」とで対応する共通点は、具体的にどういう部分に“乗れて”、どういう部分に“乗れない”のか、を示すものであると考えた（以下、項目を再掲）。

- a) 同級生との関わり
- b) MTM 社課題と科目タスクのつながり
- c) ペースメーカー
- d) 履修済み科目
- e) 熊大 SCC と実業務との比較
- f) 熊大 SCC 設定への各自の取り組み

また、学習者のプラス方向の声は、熊大 SCC が提供する機能（所与の条件）に加えられた個人の工夫である。つまり、これら具体的な個人の工夫は、アドオン提案のヒントとなるものであると言えるだろう。

3.2 熊大 SCC 学習者へのアンケート調査

ポータル FAQ で想定された熊大 SCC 取り組みへの困難やリフレクションデータの分析結果から、学習者は熊大 SCC で提供された文脈と自分自身の現実の文脈とを照らし合わせて学習に取り組んでいることがわかってきた。そこで、熊大 SCC 学習経験者に対し、主に現行業務と熊大 SCC 業務のやり方の差異や自分にとっての熊大 SCC への距離についてのアンケート調査を行った。

方法

熊大 SCC で提供された文脈と自分自身の現実の文脈とをどのように照らし合わせているのかという観点から、大きく 6 つに分けて 31 の質問を作成した。6 つの大項目は次の通りである。

- 1 あなたの基本情報について教えてください。
- 2 SCC [前期] を選択したかどうかについて教えてください。
- 3 あなたと SCC [前期]・科目内容との距離を教えてください。
- 4 あなたの普段の仕事などのやり方と SCC [前期] との関連について教えてください。
- 5 あなたの SCC [前期] への印象などについて教えてください。
- 6 SCC [前期] で学んだことが、現在にどう活かされているかを教えてください。

アンケートは Web 上で答えられるものとし、在校生、修了生に分けて、アンケートへの回答を呼びかけた。対象者は、熊大 SCC が実施された 2008 年から 2011 年の 4 年間の約 80 人である。

結果⁷

在校生、修了生 19 人から回答を得た。以下に主な項目についての結果をまとめる。

1) SCC の選択（回答者 19 人）

SCC を選択した人は、17 人であった。SCC を選択しなかった 2 人のうち、1 人は「SCC が開講されていなかったから⁸」、もう 1 人は「SCC で取り組む 5 科目の中に既習科目があったから」という理由であった。既習科目については、別の質問の自由記述で「既習科目があったため SCC に乗れなかった」という意見があった。

SCC を選択した 17 人のうち「途中で辞めた人」は 3 人であった。その理由は、「私事のため大幅に遅れた」「SCC 外の科目とのスケジュール調整が煩雑だった⁹」「実際の仕事も近いので特に新しい学びを感じなかった」というものであった。これらは、熊大 SCC に取り組む際の困難を表す意見である。

自由記述の中には肯定的な意見もあった。それらは「[すでに学んでいたがその]復習になった」「SCC 外の科目を並行して学んだため学びが広がった」であった。

2) SCC の選択時期（回答者 17 人）

表 3.1 熊大 SCC の選択時期

受講年度	人数
2008 年	4 人
2009 年	3 人
2010 年	7 人
2011 年	3 人

各年の意見が集まった。

3) 就業経験年数（回答者 19 人）と仕事（回答者 19 人）

表 3.2 就業経験年数毎の人数

就業経験年数	人数
経験なし	1 人
5 年未満	0 人
10 年未満	3 人
10 年以上 20 年未満	7 人
20 年以上	8 人

就業経験があると回答した 18 人全員が、熊大 SCC 学習時点で仕事をしていたと回答した。

⁷ アンケート項目およびアンケート結果の詳細を付録 C に記載した。

⁸ この回答者は厳密に言えば対象者ではない。アンケート回答への呼びかけを修了生全体に対して行ったために生じた。対象者ではないがわざわざ回答してくださったということになる。回答してくださった修了生のみなさまに感謝したい。

⁹ 熊大 SCC 対象科目以外を履修した場合、ストーリーとは別に学習を進めることになる。

就業経験年数と併せて考えてみると、ほとんどが社会人経験豊かな人と言えるだろう。なんらかの自分のやり方を持った上で学習に臨んでいると想定して差し支えないだろう。

4) SCC への期待（複数回答）

表 3.3 熊大 SCC への期待

項目	数
今まで知らなかった学習方法が学べそうだった	14
ペースメーカーとして利用できそうだった	7
必修科目をまとめて学習できそうだった	4
ストーリーが現実の仕事などに応用できそうだった	3
その他	5

教授システム学専攻は教授システム学を学ぶ専攻であるため、「今まで知らなかった学習方法が学べそうだった」と、積極的な経験を求めたのだろう。

次に多かったのが、「ペースメーカーとして利用できそうだった」であった。3番目の「必修科目をまとめて学習できそうだった」と考え併せると、熊大 SCC の学習管理支援機能への期待も高いと言えそうである。

一方で、「ストーリーが現実の仕事などに応用できそうだった」と答えた人は少なかった。リフレクションデータの結果から考えると、熊大 SCC は実際には現実の仕事に大いに応用されていると考えられるため、熊大 SCC の「現実の仕事に応用できる」という側面が、学習前には十分理解されていない可能性がある。

なお、熊大 SCC と似た学習経験の有無に関する回答は下表の通りである。

表 3.4 熊大 SCC と似た学習経験の有無

項目	数
あった	2
少し違うが似たような経験があった	5
なかった（全く新しいものだった）	9

5) SCC と現実の仕事との類似点（状況・役割・近く感じられたか）

熊大 SCC と熊大 SCC 履修時期の仕事との類似点については、熊大 SCC を履修した 17 人からの回答を得た。状況が似ていたか、役割が似ていたか、近く感じられるものだったかという 3 つの質問の答えは以下の通りである。

表 3.5 熊大 SCC と現実の仕事との類似点

項目	状況	役割	近くに感じられたか
似ていた	5	5	6
似ていなかった	10	10	8
どちらとも言えない	2	2	3

この結果を、SCC を近くに感じたかどうかをキーに、状況・役割で整理したのが次表である。

表 3.6 熊大 SCC と現実の仕事との類似点（近くに感じられたかどうかをキーに）

近く感じなかった		8
	状況が似ていなかった・役割が似ていなかった	8
近くに感じた		6
	状況が似ていた・役割が似ていた	4
	状況が似ていなかった・役割が似ていた	1
	状況が似ていなかった・役割が似ていなかった	1
どちらとも言えない		3
	状況はどちらとも言えない・役割はどちらとも言えない	1
	状況は似ていた・役割はどちらとも言えない	1
	状況はどちらとも言えない・役割は似ていなかった	1

状況も役割も似ていなかったから近くに感じられなかったというのは、納得のいく説明である。また、状況も役割も似ていたため近くに感じたという答えも納得できる。どちらかが似ていたから、近くに感じたという答えも、そのどちらかに引っ張られてそう感じたと言えるだろう。興味深いのは、状況も役割も似ていなかったのに近くに感じられるという回答である。状況や役割以外に、熊大 SCC を近く感じさせる何かがあると考えられる。

熊大 SCC のストーリーが実際の仕事に近いことは、ストーリーに入り込み易い要因の一つになると予測したが、必ずしも学習のプラスになるわけではないことが、一例ではあるが示された。

6) SCC と現実の仕事との類似点（課題解決方法）

熊大 SCC での課題解決方法と仕事での一般的な課題解決方法についても質問を行った。一般的な課題解決方法についての結果は次の通りである。（多い順に記載）

表 3.7 仕事での一般的な課題解決方法

項目	数
インターネット・本などを調べる	17
そのことに詳しい人に聞く	11
身近な人（上司や同僚など）に聞く	11
何度もやってみる	8
誰かに代わりにやってもらう	3
その他	1

インターネットや本などで調べることが最も多く、これが一般的によく取られている方法であることがわかった。次に多いのが、「人に聞く」であった。「そのことに詳しい人に聞く」「身近な人に聞く」が多かった。次に熊大 SCC でも同じ方法をとったかを尋ねた。

表 3.8 熊大 SCC でも仕事での一般的な課題解決方法と同じ方法を取ったか

項目	数
同じ	12
違う	3
アレンジした	1
その他	1

同じ方法をとっていると答えた人がほとんどだったが、普段とっている方法が大きく2つ（インターネットや本を調べる・人に聞く）あったため、どちらの方法を取ったのか、もう少し詳しく探る必要があった。熊大 SCC では、インターネットや本を調べるだけなのか、あるいは、詳しい人・身近な人に聞くという戦略も取られたのか。どのような戦略を取ったのか、インタビューで確認することにした。

次に、一般的な課題解決時の気持ちと熊大 SCC の課題解決時の気持ち、そして、一般的な課題解決プロセスと熊大 SCC の課題解決プロセスについての結果を示す。次表は、大きく課題解決時の気持ちと課題解決プロセス時の気持ちに分け、それぞれ一般的な場合と熊大 SCC の場合で並べた。

表 3.9 熊大 SCC と現実の仕事との類似点

項目	課題解決後の気持ち		課題解決プロセス時の気持ち	
	一般的	SCC	一般的	SCC
うれしい（充実感・達成感がある）	16	15	15	11
あまりうれしくない（充実感・達成感はない）	1	2	2	5

一般的な場合と熊大 SCC の場合について、課題を解決し終わった時点での気持ちにほとんど差はないが、課題解決プロセス時の満足度（うれしい気持ち）はやや差がある。熊大 SCC では課題解決プロセスにやや満足が少なかった。

7) SCC への印象（学習開始時と学習終了時）

学習開始前と学習終了時の熊大 SCC への印象を人別に見たのが次の表である。

表 3.10 熊大 SCC の印象（学習開始時と学習終了後）

「快適・楽しい」で開始		7
	よい印象のまま	6
	戸惑いが続く	1
「快適・楽しい」 & 「戸惑い・不快」で開始		2
	戸惑いが続く	2
「戸惑い・不快」で開始		7
	楽しい・プラス面を感じた	5
	戸惑いが続く	2

この結果から、追加調査の必要な点が見つかった。「戸惑いはなぜ続いたのか」「『快適・楽しい』と『戸惑い・不快』の2つの印象を持ったのはなぜか」「『戸惑い・不快』で開始しながら、最後には『楽しい・プラス面を感じた』に転じたのはなぜか」

なのである。

自由記述について見てみると、「快適・楽しい」で終わったものの中には、「やりとげた」というような達成感を示すものが多かった。「戸惑い・不快」で終わったものの中には、「焦り」や「じっくり取り組めなかった」などがあった。「戸惑い・不快」で開始しながら、「楽しい・プラス面を感じた」で終わったものでは、「慣れた」「意欲・動機があればストーリーは関係ない」「複数科目が効率よく学習できた」「面白い一面もあった」などがあった。

考察

(1) の SCC 選択の理由として挙げられた既習科目については、SCC 選択の上で考慮すべきポイントの一つであることがわかる。ただし、これは熊大 SCC の設定だけの問題ではないため、アドオンの範疇外であると考えた。

熊大 SCC での課題解決の方法として具体的にどのような戦略をとったのか、また、熊大 SCC 開始時と終了時に持った印象から生じた疑問については、インタビューで追加調査を行こととした。

熊大 SCC での課題解決方法が、普段とっている方法と異なるものであれば（例えば、普段は「人に聞く」という戦略がとられているにも関わらず、熊大 SCC ではそうでないなど）、他者に尋ねるといような部分をアドオンとして付け加えることで、ストーリーの文脈を変えることなく、熊大 SCC を身近に感じさせることができるのかもしれない。また、この点について詳しく調べることにより、熊大 SCC での課題解決プロセスへの満足度がやや低い点も解決できる可能性がある。

また、「戸惑い・不快」で熊大 SCC の学習を開始しながら、「楽しい・プラス面を感じた」で終わったと答えたものに記載された自由記述に、「慣れた」「意欲・動機があればストーリーは関係ない」などがあった。熊大 SCC への慣れを促す仕組みや学習内容と学習ペースとの間に折り合いをつける仕組みがあれば、より満足度が高まるのではないかと考えられる。

3.3 熊大 SCC 学習者へのインタビュー調査

アンケート調査を踏まえ、熊大 SCC の体験について、修了生、在校生にインタビューを行った。

方法

アンケート調査時に、「インタビューに答えてもよい」と回答した学習者全員にインタビュー依頼メールを送信した。返信があり、かつ、日程調整がついた 5 人にインタビューを行った。1 人は遠隔同期（Skype）で、4 人は対面で行った。

インタビューの項目として、あらかじめ、以下のような内容を挙げ、ほぼこれに沿って話を聞いた。ただし、回答者が話したいことがらについては、項目にこだわらず、適宜、質問をさしはさみながら自由に話してもらった。

インタビューは録音し、事後に内容を書き起こした。以下は、主な質問項目である。

a) 課題への具体的な取り組み

アンケートで一般的な課題解決と SCC での課題解決について、方法は類似していたとの回答を得たが、どういうところが具体的に類似していたのかアンケートでは十分に明らかにしきれなかったため。また、課題解決プロセスについては SCC の課題解決プロセスへの満足度はやや低かったため、プロセスについて振り返ってもらい、具体的にどういう点に問題を感じたのかを語ってもらう。

b) SCC 開始前／終了後の印象

特に、最初と最後とで異なった印象を持った人には、その理由をあきらかにしたいため。

c) SCC のどんなところが現在に役立っているのか

現在取り組んでいる仕事から SCC を眺めてもらう。学習中にはあまり役立つと感じなくとも、後に「こんないいことがあった」ということがわかれば、そのような観点をアドオンに盛り込むことができるだろう。

d) SCC をよりよくするアイデア

SCC は新しい学習法であり、そのやり方を自分のものとするという見地から、いろいろなアイデアがあると考えた。

結果¹⁰

次表は、インタビュー対象者、学習年度、方法、インタビュー所要時間を整理したものである。

表 3.11 インタビュー対象者・方法の概要

対象者	学習年度	方法	所要時間（トータル）
A さん	2010 年度	遠隔	1 時間 15 分
B さん	2009 年度	対面	3 時間
C さん	2008 年度	対面	2 時間
D さん	2010 年度	対面	2 時間 30 分
E さん	2010 年度	対面	2 時間 30 分

インタビューの所用時間は、1 人につき 1 時間～3 時間程度であった。インタビューの中から、各人が具体的にどのようなことを行ったのかについて語っているところを中心に整理し、次の 3 つの観点を得た。

(1)リアリティ

- ・（学習仲間とのやりとりを通じてリアリティを感じた：Aさん）わたしがいちばんリアリティを感じたのは、業種がみんな違うんですけども、業種が違っても、思っていることが結構似通ってるなっていう風に思ったときに、ああ、リアルだなって感じました。例えば、医療系とか、看護師さんとか、医療系の人がいますよね。そういう人と、実は同じ、考えを持ってるとか、
- ・（実際に業界で働いている人によってリアリティを感じる：Cさん）やっぱり合宿って言うフェイスツーフェイスの場で、酒飲みながら、とかっていう場で、話をすると、ああ、そうなんだ。全く教育畑でない人もいらっしやっただ、そういう方からすると、ほんとにこういうストーリーなん

¹⁰ インタビューの結果については、一部に固有名詞を含む思い込み発言等が見られたため、全文掲載は行わない。閲覧の希望等があればお問い合わせください。

かなあ、とか、疑問がでるじゃないですか。そこがヘンに猜疑心になったりとか、疑心暗鬼になったりとかするところだと思うんですけど、で、そういうもんだよねっていう風に、やったことある人間が言えば、ストーリーのシリアス感とか、信頼感っていうのかな、〔が増す〕

熊大 SCC の設定のリアリティについて、A さんは作り込まれた設定については言及しなかったが、同級生の情報からリアルさを感じたと述べた。また、C さんは、熊大 SCC の文脈と同じ業界の人からの情報によって、シリアス感、信頼感が作られると述べた¹¹。

(2) コミュニケーション

熊大 SCC で与えられる業務への取り組みにもさまざまなものがあった。以下、インタビュー内容を具体的に提示する。

- ・ (さまざまなチャネルのコミュニケーションがリッチな経験: Bさん) けっこうレスポンスが頻繁なので、すごくリッチな経験だったのかなという印象ですね。いい印象ですね。がんばった分だけ、すばらしいフィードバックをいただけて。これそういうフィードバックか、こうしたらどうでしょうか。それなら、こうしたら、こうじゃないっていうキャッチボールがあったりとか。すごくよかった。
- ・ (同期的なやりとりで独りでないと感じた: Cさん) 学びは一人でも、掲示板とか、リフレクションとか、同期がとられるじゃないですか。だから他にも自分と同じ勉強をしている人が、いるんだなあって、掲示板上でどう思った、ああでもないこうでもないっていう、やりとりがある、そういう、順列化がきちんとされているんで、その選択の自由度はないんですけど、比較的流れに乗って学べる。かつ、流れに乗っているがゆえに、集合研修と比較した場合でも、集合研修ばい学習。
- ・ (リアルな同級生との会話の場があった: Eさん) あの、僕、Kさんが〔同級生として〕¹²いるわけですよ。リアルに、目の前に。同じことやっている人が。(中略) 席も近いです。そこで、リアルに会話してるから、あーまたTさん、こんなこと言うてるわねー、みたいな話をして、あれは、こうなっちゃう、こうなっちゃうっていう。それで、だから、一人で悩むことはなかったんでしょね。
- ・ (後期になってからリアルなつながりができた: Aさん) (実際にリアルな場でコミュニケーションを取ったのは) 最初(から)ではないですね。まだ、知り合って日が浅いので、そんなになんでも話し合える、までは仲良くなってない。で、仲良くなるっていうのは、合宿で実際にお会いしたあと、は、結構、そういったものはあったかもしれないですね。特に後期の、遠隔〔科目「遠隔教育実践論」の集中講義〕、とかあったじゃないですか。(中略)〔それまでは〕そうですね。もう自分で、自分の世界で考えてたって感じですね。
- ・ (どこでコミュニケーションを取ったらよいのかわからない: Bさん) 〔質問: 熊大 SCC の中に組み込まれたバーチャルな部屋である喫茶室・秘書室・熊大 MTM 分室の活用はされましたか? (これらは電子掲示板を通じて活用できる)〕ほぼしてないです。複数あったんですけど、結局、何が得られる、それぞれどういう違いがあるのかが、いまいわからなくて、自分が持っている悩みを、どこですればいいのかわからないのと、(中略) 人に知られたくないぐらいの内容であれば、誰に質問したいかっていうの、相談相手も選ぶと思うんですね。質問者としては。テーマによっては、この先生には知られたくないだったりとか、サポートの人、研究生の人に聞かれるじゃなくて、回答もらうんじゃなくて、この先生から、回答が欲しいんだっていうのを持っていたりするわけですよ。なんだけど、誰が回答者なのかがわからなかったら、質問できない、ですよ。
- ・ (フィードバックがないと意欲が上がらない: Dさん) フィードバックっていうのは基本なんですよ。それが遅すぎる。そのタイミングがものすごくね、微妙なんだな。確かに、..、だってさ、SCC の1だったらね、フィードバックなんかないほど、もうがんがんね、なんか、課題課題でしょ。(中略) 丁寧さがなかったら、やる方の学習意欲は上がらないん。

¹¹ C さんはいわゆる業界人なので、これは合宿という場で C さんが他の人から聞いたことであろう。

¹² E さんと K さんは同じ会社、同じ職場のリアルな同僚でもあった。非常にまれなケースである。

上の3つは実際に取れたコミュニケーションについて良かった点であり、下の3つはできなかったコミュニケーションへの言及だと考えて良いだろう。

(3) ペース

- ・(途中の差し込み仕事の設定で学習の遅れが吸収できた:Aさん)ここで知的財産権〔科目「ネットワーク上の知的財産権及び私権」〕が入ります、みたいな感じで。あれは、実はすごくありがたくって、ああ、よかったって思いましたけど、でも、ふつうの大学、通学生の大学だったら、そんなこと絶対できないので、ほんとにオンラインならではの、と思いましたね。
- ・(途中の差し込み仕事の設定で学習の遅れが吸収できた:Dさん)〔科目「ネットワーク上の知的財産権及び私権」にひもづけられた業務は、〕僕はすごく助かった。あの先生はやり溜めが利いたし、僕はまじめだったん。完璧にやったしね、法律のこと。よく勉強した方ですよ。自分としては、あんなんようやったな。(中略)確かさ、この辺りで足並みが揃わなかったんだよ。バラバラで、遅れまくって、でなんか、緊急措置っていうかさ、温情かなんかで、これを、そのあと、入れ替えたじゃん。だからこれを、ちょっとあとにして、こっちを先にやることにして、っていう風にしてくれたんだよね。
- ・(途中の差し込み仕事の設定で学習の遅れが吸収できた:Eさん)写経〔「ネットワーク上の知的財産権及び私権」で設定されている法律条文を書き写すタスクを指す〕に関しては、心を落ち着かせて書けば、出せますでしょ。だからある程度時間が見込めるわけですよ。必要な時間がね。予定が立てやすかったですよね。知的〔ネットワーク上の知的財産権及び私権〕のやつは。
- ・(各科目を平均して学習できるとは限らない:Aさん)やっぱり、勉強にかかるボリュームも、平均的になるとは限らないな、って思っていて、ブロック毎に分かれているじゃないですか。
- ・(不得意はじっくり学びたかった:Bさん)SCCとかで、取り組める課題のタイミングが決められたりすると、ここは知っているから、サクサク自分でこなして先に進みたいんだけど、進めない、待たなきゃいけないですよ。逆に、弱いから、ここはすごいじっくりやりたくて、先生にも質問とか、仲間にも質問してフィードバックいっぱいもらって、いっぱいやりたいてって思っても、そこはそれでサーッともう急いでやって、最低条件がクリアしたら次行かないと間に合わないってなってるので、じっくりやられてないですね。なので、そういう、自分の既存の知識とか経験とか、学習の関心の度合いに合わせて、学ぶ時間を、あんまり自分で自由には調節できなかったっていうのが、結構不満だったんですね。

科目(業務)をまたぎ途中で差し挟まれた仕事という設定は、3人の人が明示的に、「遅れが取り戻せた」と述べた。Bさんは、業務のペースについて、学習として考えると十分時間が取れなかったと述べた。

なお、熊大 SCC では、次のような並びで科目が設定されている。各科目はそれぞれ3つに分けられ、ID 1 (インストラクショナル・デザイン I) の間に、知財私権(ネットワーク上の知的財産権及び私権)が差し挟まれる他は、各科目に集中して取り組むというスタイルとなっている。

①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮
EL 概論	EL 概論	EL 概論	ID 1	知財 私権	ID 1	知財 私権	知財 私権	ID 1	通信 シス	通信 シス	通信 シス	教ビ 経営	教ビ 経営	教ビ 経営
Bk 1/2	Bk 3	Bk 4	Bk 1	Bk 1	Bk 2	Bk 2	Bk 3/2	Bk 3	Bk 1	Bk 2	Bk 3	Bk 1/2	Bk 3	Bk 4/5
4月「MTM社の一社員」になり、降り注ぐ上司の指示に「学びながら」対応! 8月														

図 3.3 熊大 SCC の科目の並び

考察

以上の3つの観点は、次のように整理できるだろう。

- (1) リアリティ：同級生（特に熊大 SCC と同じ業界の業界人）の発言から SCC 設定のリアリティを感じる
- (2) コミュニケーション：LMS 以外のリアルなやりとりが学習に影響を与える／学習者の環境によって差異が大きい
- (3) ペース：緩急をつけた学習ペースへの要望

(1) については、熊大 SCC の設定には十分なリアリティがあり、業界人のリアルな言葉によって補完されるため、FAQ に盛り込むなどで対応が可能だろう。アドオンとする必要はないと判断できる。(2) については、学習者はコミュニケーションから大きな恩恵を受けているため、アドオンによっても支援できると考えた。(3) については、緩急をつけた熊大 SCC のペースは、現在のところほぼ成功しているのではないかと考えられる。

4 アドオン

以上の熊大 SCC 学習者への調査の結果をもとにアドオンを考えた。これらの概要を記述する。

4.1 アドオンのコンセプト

リフレクションデータの分析の結果から、以下の4点のしくみがあれば、学習者は熊大 SCC へより近づけると考えた。

- 1) 熊大 SCC を実務へ近づけるしくみ
- 2) MTM 業務へ着目させるしくみ
- 3) 同級生（同僚）と関わるしくみ
- 4) 熊大 SCC に慣れるしくみ

また、アンケート調査、インタビュー調査からは、以下の2点を盛り込むべきだと考えた。

- 1) コミュニケーション：LMS 以外のリアルなやりとりが学習に影響を与える／学習者の環境によって差異が大きい
- 2) ペース：緩急をつけた学習ペースへの要望

別の言い方をすると、実際の学習者の声から、「ペースメーカーや学習者同士の一体感から生まれる励み」「リアリティある熊大 SCC 設定への信頼感」がプラスの側面として上がってきた。具体的には、熊大 SCC の設定に埋め込まれたペースメーカー（マイルストーン）機能の他に、Skype、飲み会、リアルな同僚との会話などがリアリティを高め、業務を進めていく上で有益であった。しかし、熊大 SCC の機能として提供された「喫茶室・秘書室・熊大 MTM 分室」などは有効に活用されなかった。つまり、コミュニケーションの場は業務（学習）を進める上で、大きなプラスになるが、学習者個人の学習環境に強く依存する。そのため、アドオンとして系統的に支援する価値があると結論づけることができる。

以上を受け、「コミュニケーション環境を均等に配する機会を作り、コミュニケーションを活性化するためのアドオン」の提案を目指し、次のようなコンセプトを作り上げた。

3つのS(個々人が得たものをみんなが得るしくみ)

- 熊大 SCC への準備を補強する(Set)
 - ・ 熊大 SCC への期待を高め、熊大 SCC により早く慣れるための下地を作る。
- 進捗管理を支援する(Steer)
 - ・ 学習のペース配分を補強する。
- 共有への取り組みを促す(Share)
 - ・ 仕事の枠組みの共有を通じて、リアル感をさらに付加する。

4.2 アドオンのラフスケッチとそれに対する意見

以上のコンセプトに対応する3つアドオンのラフスケッチを作成し、それに対する意見をもらった。

- a. 季節の行事 ([Set] [Share] に対応)
- b. 出社・退社・休憩中などの表示 ([Set] [Steer] [Share] に対応)
- c. 週報と社内ミーティング ([Set] [Steer] [Share] に対応)

それぞれのラフスケッチに対する意見は次の通りである。

「a. 季節の行事」

- ・ バーチャル上でも会う機会は必要
- ・ 動画や写真などでその人の雰囲気伝えるとよい
- ・ 自分でキャラを設定してもよい
- ・ 時間を区切って行くとメリハリができる
- ・ SCC で設定された人物は「あなた」一人なので、挨拶は難しいかも (※)

「b. 出社・退社・休憩中などの表示」

- ・ ログインデータが活用できる
- ・ 日時によって「深夜勤務」とか「休日出勤」とかの表示も励みになるかも
- ・ Skype のオンライン状態で他の人の状況が見えるのも活用したことがある

「c. 週報と社内ミーティング」

- ・ 簡単な報告なのでやりやすい
- ・ 週報に自由記述欄を設けて、一つにしてもいい
- ・ 週報を全員で共有すれば社内ミーティングのイメージができる
- ・ 中村部長とはやりとりがないので中村部長が相手では難しいかも (※)

※印を付けた意見は、見せたラフスケッチに対する実現可能性に対する疑問の声であった。また、この他に、「これまでに行ってきた SCC の学び方を提示してみるとよい」「学生側にも旗振り役(学級委員長みたいなイメージ)があってもいいかもしれない」という意見ももらった。

4.3 アドオン案

熊大 SCC 学習者の体験の分析結果、および、アドオンのラフスケッチへの意見を受け、次のようなアドオン案を具体的に考えた。これらの概要を記す。

4.3.1 顔合わせ花見会 (〇〇会)

このアドオンは、他の学習者と親しくなる下準備を行うことをねらいとするものである。花見会（〇〇会）では、熊大 SCC への疑問・質問などを他の学習者と共有する準備を行う。

日時	内容	関連科目
2月22日(月)～4月5日(月)	オリエンテーション科目 [初回観覧時の説明]	
①オリエンテーション科目 終了後に設定	②開催日時を限定 中村部長への挨拶	
離合わせ花見会 4月1日(木)	24時壁限定！ 3/31 16:00～4/1 15:59 みんなと戦いましょう！	
4月6日(火)～4月11日(日)		10時までのためにシステム停止
4月10日(土)		入科式

図 4.1 「花見会」導入部



図 4.2 「花見会」イメージ

顔合わせ花見会の具体的なねらいは次の通りである。

①オリエンテーション科目終了後に設定・・・合格後、入学前に設定されたオリエンテーション科目によって、学習者は同じ時期に入学した学生の存在（名前等）を知るが、この中には特に個人的な情報をやりとりする場は設けられていない。そこで、同期生とさらに親しくなれるように、オリエンテーション科目後に顔合わせ花見会を設定する。

②開催日時を限定・・・オリエンテーション科目でも期限が設けられているが、開催日時を限定することによって、さらにペースを意識するようにする。

③自己アピールを促進・・・自分自身がどのような人であり、どういうことに疑問や質問を持っているのか、早い内から共有化を図るようにする。SCC という学習形態が初めての人も多いため、ここであるべく疑問・質問を考える機会を設ける。

④隣接する人に返信するなどのルールを設ける・・・リアルな花見会では隣り合った人同士で話をするが、そのようなイメージで隣接する人（自分の書き込みのすぐ前とすぐ後に書き込んだ人）に返信をするように促し、コミュニケーションの活性化を図る。

4.3.2 出社・退社等表示

このアドオンは、熊大 SCC に取り組む者に互いの存在を感じさせることをねらいとするものである。

①「出勤」を表示

②出勤中の人の名前を表示

④「休憩中」は明示的にクリックして表示

③本人の「出勤～帰宅」時間を集計し、アクセス可能に

日時	内容	関連科目
2月22日(月) - 4月5日(月)		オリエンテーション科目 [初閲覧時の説明]
オリエンテーション 3月22日(月) - 4月5日(月)	中村部長への挨拶	
4月1日(木)	みんなと親しくなろう！	
4月6日(火) - 4月11日(日)		ID移行のためのシステム休止
4月10日(土)		入科式

図 4.3 「出社・退社等表示」イメージ

出社・退社等表示の具体的なねらいは次の通りである。

①「出勤」を表示／②出勤中の人の名前を表示・・・ログイン情報と連動し、「出勤」と表示させる。同時間に LMS にアクセスしている人を明示し、互いの存在を感じさせる。

③「出勤（ログイン）～帰宅（ログアウト）」の時間を集計し、自らの業務時間を把握するためのデータとして提供する（ただし、時間は目安にしか過ぎない）。この機能は、互いの存在を感じさせるものではなく、ペース等の把握に役立てるものである。

④「休憩中」は明示的にクリックして表示・・・「休憩中」ボタンをクリックすると「休憩中」に入り、その人の名前が表示される。業務で行き詰まったとき、少し息抜きをしたいときなど、誰かと話したくなったときにどの人とコンタクトできるのかの目安情報を示すことをねらう。実際のコミュニケーションは、電子掲示板や Skype などで行うかもしれない。

4.3.3 週報と社内ミーティング

このアドオンは、自分で自分に約束をすることによって進捗を促進することをねらいとするものである。

①「週報」をイメージしたアセスメント

第1週 週報

竹岡 篤永
開始: 2012年4月3日 01:21
質問: 2

終了 すべて保存 ヘルプ

1. (点数:10)
今週の状況について、以下のように報告します。

☐ 1. 課題は提出済みです。

☐ 2. あと、1～2日かかります。

☐ 3. 1週間程度、遅れそうです。

☐ 4. しばらく、取り組みません。

☐ 5. 相談したいことがあります。(ヘルプ！)

②課題への取り組み状況について選択肢で答える

解答を保存

2. (点数:10)
今週の共有したい方法・内容は次の通りです。

③共有したいことを記述

New Insert equation

解答を保存

終了 すべて保存 ヘルプ

時間 01:21:48

許可 ---:--:--
残り ---:--:--

質問の状態

● 未解答
! 解答は保存されません
✓ 解答済み

1 2
● ●

図 4.4 「週報」イメージ

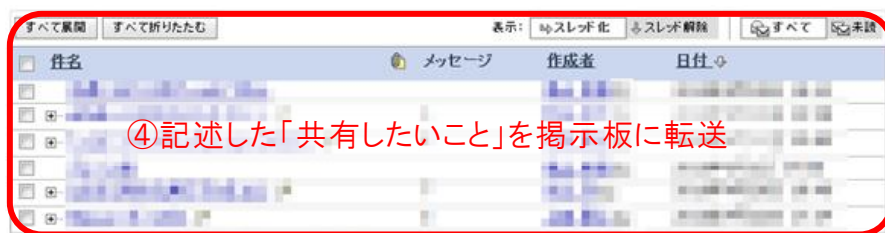


図 4.5 「社内ミーティング」イメージ

週報・社内ミーティングの具体的なねらいは次の通りである。

- ①「週報」をイメージしたアセスメント・・・例えば、週に１度程度、簡単なアセスメントに答えることによって、進捗への意識を高める。
- ②課題への取り組み状況について選択肢で答える・・・進捗度合いは選択肢を用い、わずかな時間で答えられるようにする。この部分は本人にしか見えないものとする。
- ③共有したいことを記述・・・選択肢では答えられないことは、簡単に記述する。
- ④記述した「共有したいこと」を掲示板に転送・・・共有したいこととして記載した内容は電子掲示板に転送し、互いにわかるようにする。また、コメントを入れるように促し、社内でミーティングをするかのような機能を果たさせる。

5 研究成果のまとめと今後の課題

5.1 本研究の成果のまとめ

本研究は、学習者が現実持つ文脈に必ずしも類似しているとは限らないストーリー型学習の文脈を、ストーリーの文脈そのものは変えることなく、学習者本人の文脈によりいっそう関連づけ、学習者がそのストーリーを自分自身の切実な問題として感じさせる何らかの仕掛け－アドオンの提案を行うものである。この大きな目的の下に、まず以下のような問いを設定し、調査を行った。

- ① うまくストーリー型の文脈に“乗れている”学習者は、提供されるストーリーの文脈と現実の文脈とをどう結び付けているのだろうか？ どのような方策をとっているのだろうか？
- ② うまく“乗れない”学習者は、どのような部分に妨げや困難を感じているのだろうか？
- ③ うまく“乗れない”学習者は、困難を感じたときにどのような対処方法を取っているのだろうか？

これらを明らかにするため、熊大 SCC 学習経験者に対して調査を行った。まず、学習期間中に書き込まれたリフレクションデータの分析を行った。この結果から、学習者の熊大 SCC への取り組みには3つのパターンのあることがわかった。1つは、ストーリー文脈に“乗る”ものであり、これは SCC 提供者が想定していた学習への取り組みであろう。しかし実際には、学習者のほとんどが社会人であることもあり、自らが現実抱えている業務と熊大 SCC の業務とを比較しながら取り組む学習者が多かったことが明らかになった。ストーリーに“乗る”というより、外側から眺めるというパターンである。また、ストーリーを活用しての学習形態に戸惑いもあって、出たり入ったりとも見えるパターンでの取り組みも少なくなかった。

次に、アンケート調査を行った。リフレクションデータでの分析結果を踏まえ、熊大 SCC における課題への取り組み方法と現実の業務における課題への取り組み方法の差異と、自らの業務から見て熊大 SCC の業務が似ているか・近いかを探った。また、熊大 SCC 開始時と終了時の印象を探った。その結果、課題解決方法については、熊大 SCC では人に聞くことができない他、大きな差異はなかった。また、似ているか・近いかについては、似ていないと答えた人が半数を超えもっとも多かった。似ていないと回答した人のほとんどは熊大 SCC を近く感じなかったと答えたが、中には、似ていないにもかかわらず近く感じた人もいた。そして、印象については、「快適・楽しい」で開始した人と、「戸惑い・不快」で開始した人とが半々であった。しかし、「戸惑い・不快」は解消され、「快適・楽しい」で終わる人がほとんどであった。

アンケートでは捉えきれなかった具体的な取り組みを探るため、さらにインタビュー調査を行った。熊大 SCC への具体的な取り組み方法、開始前・終了後の印象、現在の業務への役立ち具合を質問項目とした。その結果、同級生、特に熊大 SCC の文脈と同じ業界で働いている人のリアルな発言から熊大 SCC の設定にリアリティを感じ、ストーリー文脈への信頼感が増したことがわかった（リアリティ要因）。また、LMS 以外のリアルなやりとりが学習に大きな影響を与えているが、学習者が置かれた環境によって差異が大きいことがわかった（コミュニケーション要因）。さらに3つめ

の要因として、緩急をつけたペースへの要望が大きいことがわかった（ペース要因）。

これらの調査をもとに、「ペースメーカーや学習者同士の一体感から生まれる励み」「リアリティある熊大 SCC 設定への信頼感」に着目し、「人によって異なるコミュニケーションを均等に配する機会を作り、コミュニケーションを活性化するためのアドオン」の提案を目指した。具体的な提案を行う前に、アドオンのコンセプトを作成した。次の3点がそのコンセプトである。

- 熊大 SCC への準備を補強する（Set）
 - ・ 熊大 SCC への期待を高め、熊大 SCC により早く慣れるための下地を作る。
- 進捗管理を支援する（Steer）
 - ・ 学習のペース配分を補強する。
- 共有への取り組みを促す（Share）
 - ・ 仕事の枠組みの共有を通じて、リアル感をさらに付加する。

これを受け、提案したアドオンの具体は次の通りである。それぞれ、複数のコンセプト（盛り込む機能）に対応している。

- a. 季節の行事（顔合わせ花見会）（[Set] [Share] に対応）
- b. 入社・退社・休憩中などの表示（[Set] [Steer] [Share] に対応）
- c. 週報と社内ミーティング（[Set] [Steer] [Share] に対応）

熊大 SCC 学習経験者への調査結果に基づいて作成した、これらアドオンの提案が本研究の成果である。

5.2 今後の課題

本研究では、熊大 SCC 学習体験者の調査からアドオンの提案までを行った。これらのアドオンを具体的に開発し、試用を踏まえ、効果を評価することが、今後の課題であることは言うまでもない。

またさらに、アドオンの試用・評価を踏まえ、他のストーリー型学習への応用の可能性についても、今後の研究テーマである。熊大 SCC 以外の SCC は現在のところたいへん少ないが、GBS に基づいて設計されたストーリー型学習にももちろん文脈が導入されている。PBL（Project-Based Learning）など文脈を取り入れた学習も増えてきている。本研究の目指すところが、これらの学習で提供される文脈を変えることなく、機能を強化するものにつながっていくならば、ストーリー型学習の可能性をさらに広げるものとなるのではないだろうか。

参考文献

- デューイ, J. (1998)『学校と社会・子どもとカリキュラム』(原著 1902 The Child and the Curriculum), 講談社
- 稲垣忠, 林向達, 中川一史 (2007) GBS に基づく小学生向け携帯電話モラル教材の開発. 信学技報, ET2007-29, 29-32
- 小松裕貴, 村松浩幸, 今村貴弘 (2011) GBS 理論に基づいた中学校技術課におけるシナリオ型環境ゲーム教材の開発. 信州大学教育学部研究論集, 第 4 号, 1-13
- 根本淳子, 鈴木克明 (2005) ゴールベースシナリオ (GBS) 理論の適応度チェックリストの開発. 日本教育工学会論文誌, 29(3): 309-318
- 根本淳子, 朴恵一, 北村隆始, 鈴木克明 (2011) 問題解決方学習デザインの研究動向. 日本教育工学会研究報告集 10(5), 151-158
- 朴恵一, 喜多敏博, 根本淳子, 鈴木克明 (2010) ゴールベースシナリオ (GBS) 理論に基づく情報活用能力育成教育の実践, 日本教育工学会論文誌 34(-), 165-168
- Schank, R. C., Berman, T. R., and Macpherson, K. A. (1999) Learning by doing. In C. M. Reigeluth (Ed.), Instructional-Design Theories and Models: A New Paradigm of Instructional Theory Volume II(Vol.2) Mahawah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates. 162-182
- Schank, R. C. (2007) The story-centered curriculum. elearn Magazine
- 田中智志 (2009) カリキュラム——どのように構成するか『キーワード 現代の教育学』, 東京大学出版会
- 梅田恭子, 江島徹郎, 野崎浩成 (2008) 情報モラル判断の枠組みを学習するゴールベースシナリオ理論に基づく教材の開発と授業実践. 愛知教育大学教育実践総合センター紀要, 第 11 号, 67-72
- 梅田恭子, 江島徹郎, 野崎浩成 (2009) 情報モラルの 4 つの判断観点とゴールベースシナリオ理論に基づく体験学習教材の開発と実践. 愛知教育大学研究報告, 58 (教育科学編), 195-201

本論文関係業績リスト

国内口頭発表

竹岡篤永・根本淳子・喜多敏博・鈴木克明（2011.11）「学習者の現実の文脈とシナリオ文脈の「ずれ」を見つけ出すために」第18回教育メディア学会年次大会（国際基督教大学）発表論文集 163-164

付録 A リフレクションデータ（予備分析）

<パターン1「学習内容を外側から眺める」に分類したデータ>¹³

1A) 業務に活かせる学習内容の発見

- 1-01「そのうちの幾つかは早速仕事に持っていけているように思います」
- 1-02「SCC での学習の進め方が業務の進め方の参考になると感じています」
- 1-03「教材コンテンツに関わらず社内の会議資料でも立派に使えるものですよね」
- 1-04「業務上の進め方や考え方のコンパスのような役割を果たすものと感じました」
- 1-05「その際学んだ理論をバックボーンとして、「いかに使えるか」を意識実践したいと思います」
- 1-10「タイミングよく＜moodle＞などに触らせていただいたので、これからより深く研究していく弾みになった」
- 1-11「パイロットとして moodle による授業を実施する予定です」
- 1-12「この科目のおかげでスタッフ向け e ラーニングシステムを開発することが出来ました」
- 1-16「常に自分の会社や相手の会社を評価する際のものさしとしてポケットの中に忍ばせておくとう有効になりえると感じました」

1B) 自分の業務の見つめ直し

- 1-06「どれも身近ですぐに発生しそうな（発生している？）トピックでした」
- 1-07「身の回りの契約書の内容について改めて気づくこともありました」
- 1-08「実際にありふれ内容であり、（中略）大いに役立ちました」
- 1-09「本当に良く質問や議論になる話題です」
- 1-13「LMS の特徴をより深く考察することにつながったと思います」
- 1-14「高価な LMS を打っているベンダーの存在意義が問われるようになりますが（後略）」
- 1-15「自分の中でのかねてからの疑問を改めて考えさせられました」
- 1-17「職員としての立場や悩み、教員との協働の在り方などを考えていくという過程が、私と同じだ！と共感しました」
- 1-18「教育ビジネスに関する見方が変化してように思います」
- 1-19「正直、教育ビジネス事業者にとってのビジネスについては、新しい視点の獲得や気づきが乏しかったように思います」
- 1-20「改めて学習してみると、とたんにそれを明確化する必要に迫られ、（後略）」

<パターン2「中間型」に分類したデータ>

2A-1) 進捗管理

- 2-04「全体の進捗管理として、SCC の流れを利用する。→科目に入ったら、SCC と科目を切り離して科目に集中する。→科目が終わったら、科目で学んだことや成果物を SCC の課題に反映させて提出する」
- 2-12「SCC のコントロールがなければ、学習に計画性がなくなり、予定通りの科目履修ができないようにも思います」

2A-2) 学習の切り口

- 2-15「当初は SCC の要求に沿う企画を思いつくことができませんでした。（中略）もっとも、仕事であれば、自分にとってリアルでなくても、考えつく必要はあるでしょう」
- 2-17「これは、中村部長に報告するビジネス文書なんだ、と思うと、スラスラ（？）書ける私です」
- 2-18「SCC の MTM 社員である自分という文脈（スキーマ）がなければ、自分の立ち位置がわからず、どうふるまえばいいのか、何をどんなふうに表現すればいいのかで迷っていたかもしれません」
- 2-20「SCC で中村部長より 教材の対象や内容にある程度の枠が与えられたことが、私にとっては教材企画のハードルをすこし下げてくれる 効果がありました」

¹³ 番号は書き込みの時間順。A はパターン 1、B はパターン 2、C はパターン 3 に付加した記号。

2-21「中村部長から「新入社員向けの教材」という指示を頂いていたので 教材を作る際に、漠然と考えずにすみしました」

2-27「「困ったときの MTM 頼み」といい ますか、課題を作成するときだけ、中村部長のメールを見るようになってしまいました。中村部長のメールや、根本先生の解説を読めば、どんな切り口で課題に取り組めばいいかきちんと示していただいているので、課題へのヒントだと思って素直に受け入れていました」

2A-3) 業務と比較しての意見

2-19「受講生の学習背景によってどうしても違和感が生まれるのは仕方がないところであると自らおっしゃっています。その記述通り、ここの調整にあまり注力してもコストパフォーマンスは高くないと思います」

2-24「日常的に幹部から受けるような「まる」つとしたオーダーでかなり現実的なストーリーで、具体的な幹部の顔を浮かべながら課題を作成することができました」

2-25「ビジネスの分野が違ふとまったく想像もできないので、中村部長にたしかなレポートを送ることができたかどうかは定かではありません」

2B-1) 科目学習（リソース）について

2-01「e ラーニング概論を学習して理解したつもりになっているレベルと、SCC での MTM 社の中村部長の指示に従って、仕事に応用するレベルとでは、大きな隔たりがあるように感じ（後略）」

2-02「私も 2つの要求水準の差がきになりますが（後略）」※2-01 の書き込みを受けての書き込み

2-03「タスクが、MTM の業務なのか、e ラーニング概論の学習なのか、それは地続きなのか、頭を切り替えてやるべきなのか、混乱していました」

2-04「全体の進捗管理として、SCC の流れを利用する。→科目に入ったら、SCC と科目を切り離して科目に集中する。→科目が終わったら、科目で学んだことや成果物を SCC の課題に反映させて提出する」

2-05「各科目にのめりこんでタスクや課題を提出した後で、「これは SCC のスタイルで出す必要があったのかも」と思い返すことがしばしばあります」

2-06「後から中村部長の指示を満たしていないことに気付いて焦る・・・ということが幾度ありました」

2-08「例えば、1 週目に中村部長のから「ここ数年の業界動向をあなたなりにまとめてください」という指示がありましたが、関連する e ラーニング概論のタスクは、e ラーニングの活用事例を 1つ挙げての調査でした」

2-22「MTM 社での課題（中村部長からの指示）に答えるために入口先生のコースで学習し、結果を提出するという活動が、企業の末端にいる現実の自分とうまくリンクできたと思います」

2-23「SCC の授業で、「何故、この課題をするのか」という課題の目的が明確に示されていたので、写経をすること自体 にストレスを感じることはありませんでした」

2B-2) 役割について

2-10「MTM 社の同僚としてのコメントか学生としてのコメントかというのも 今後切り分けないといけないのかもしれないですね」

2-11「” 業務としては、中村部長から見て、いわゆる同級生は 同僚なのか、仮想と現実の領域があいまいで、どっちにいいのか良く分からない場合があります」

2-13「どの場所でどの自分になりきればいいのか、場と発揮すべきアイデンティティが定まりきれていないのがこの 4 月 5 月の状況なのかなと思いました」

2-14「MTM 社員としての自分と、各科目毎に自分の役割分担、学生としての自分、まだ混乱を来しており、中々解決いたしません」

2-26「MTM の社員であることをよく忘れます。 課題を取り組み頃になって、また、MTM の社員にギアを変えるケースがよくあります」

2B-3) フィードバックについて

2-07「普段の場合は、指示や依頼を受けたとき、「期待されるゴール・成果物イメージ」を上司と軽くディスカッションして自分自身の納得感を高めて仕事に取り組むので、 中村部長

の指示を受ける段階でも、部長とディスカッションできる仕組みがあると良いと思いました」

2-09「実際の仕事であれば、「調査はここまで進んでいる」とか、「他の仕事が込んでいるので後3日欲しいとか」とか、声をかけるところですが（メールででも）」

2-16「書込をすることによって、そして人の書込を読むことによって、非同期ではあるものの、パソコンのディスプレイの向に人を感じることが出来ます」

＜パターン3［ストーリーに入り込んで学習］に分類したデータ＞

3-01「皆さんの課題を参考にして、ADDIEモデルに基づく業務改善シートを作成したときは、なんとも言えない達成感を感じました」

3-02「事例が提示され、それに対する対応策を検討するという課題はやりがいがありました」

付録 B リフレクションデータ（2 年分分析）

<<<大分類：よい学びができた>>>¹⁴

<<中分類：実業務に生かせる・生かした／気付きを得た>>

<小分類：SCC が実業務とリンクした>

◇実際、今回の S C C は私の業務分野ととても近いモノがあり、S C C での学習の進め方が業務の進め方の参考になると感じています。[5：e 概：J]

◇大学院の課題なんだ、と思って取り組むと、手が止まってしまうのですが、これは、中村部長に報告するビジネス文書なんだ、と思うと、スラスラ（？）書ける私です。仕事では、A 4 1 枚ないし 2 枚で何かを調べた結果を書いたり、上司に報告を出すなどは日常的にやっていることなので、S C C で学んだほうが課題に取り組みやすいと感じました。逆に、S C C の M T M 社員である自分という文脈（スキーマ）がなければ、自分の立ち位置がわからず、どうふるまえばいいのか、何をどんな風に表現すればいいのかで迷っていたかもしれません。[5：I D：P]

◇M T M 社での課題（中村部長からの指示）に答えるために入口先生のコースで学習し、結果を提出するという活動が、企業の末端にいる現実の自分とうまくリンクできたと思います。

I D や e ラーニングより契約や著作権といった法務の話題は一般企業でも身近（けど良く知らない）だからかも知れません。[5：I P：D]

◇S C C の授業で、「何故、この課題をするのか」という課題の目的が明確に示されていたので、写経をすること自体にストレスを感じることはありませんでした。（中略）何も目的がなく、写経を進めて行くことは、骨の折れる作業かと思いますが、目的を明確にすることで、学習の意欲が向上することを再確認しました。[5：I P：E]

◇事例が提示され、それに対する対応策を検討するという課題はやりがいがありました。[5：I P：K]

◇日常的に幹部から受けるような「まる」つとしたオーダーでかなり現実的なストーリーで、具体的な幹部の顔を浮かべながら課題を作成することができました。（中略）学習効果としては、人に教えるつもりで作ったことが、理解を深めることにつながったと思います。[5：I T：F]

◇ただ、どの成果物も自分の業務にシンクロできるものばかりで（というかシンクロしているものからひねり出したので）有用な学びでした。[5：I M：G]

◇SCC の考え方は、まさに仕事の現場で起こっていることをなぞるような学び方だと私も思いました。[5：収穫：P]

◇著作権に関するクレームや画像許諾など、科目と M T M 社のまわりで起こっていることのリンクがあり、科目を学ぶ目的と実務の「つながり」を感じることができました。個人的には多少関連づけが弱い科目、無理やりねじ込んだ感のある科目（学習支援情報通信システム論、教育ビジネス経営論）もありましたが、I D-1 とネットワーク上の知的財産権及び私権は意味づけを感じられたのでよかったです。[5：収穫：P]

◇S C C は良い学びでした。今までの学生時代の長きに渡って、各科目を横断的に俯瞰するという機会・発想はありませんでした。「何のためにこの科目をやっているのだろう？」という漠然とした不安・不満はあったものの、「ではどうしたらいいのだろう？」という認知には及びませんでした。[5：みんな：A]

¹⁴ 大分類を<<<大分類>>>、中分類を<<中分類>>、小分類およびさらにその下の分類を<小分類>とした。大文字アルファベットは 2010 年度学習者の書き込み、小文字アルファベットは 2011 年土学習者の書き込み。「e 概」は「e ラーニング概論」、「ID」は「インストラクショナルデザイン I」、「IP」は「ネットワーク上の知的財産権及び私権」、「IT」は「学習支援情報通信システム論」、「IM」は教育ビジネス経営論 終了後のリフレクションデータ。また、「収穫」「みんな」は、すべての学習が終わった後に全体を振り返るために設けられたコーナーに書き込んだもの。「収穫」「みんな」の順で書き込んでいます。

データは、「e 概」→「ID」→「IP」→「IT」→「IM」→「収穫」→「みんな」の順に。そして、2010 年度→2011 年度のアルファベット順に記載した。

- ◇考え方や手法はeラーニングに限らず自己学習や実務内にも応用でき、常に自分の体験などに置き換えるとわかりやすかった。[6：e概：d]
 - ◇MTM社の業務という前提があることから、現在の仕事に役立つものを作る意識で取り組めたのがよかったかなあ（自画自賛！）[6：e概：h]
 - ◇学習する内容が、実際にどのような場面の何を解決するためのものなのかを実感できるからです。学習した内容によってその課題が解決できるのか？という問いを自問自答することにより、自分の学習の到達度が明確になると感じたからです。「何のために学ぶのか」を常に意識しながら学習を進めることができました。[6：ID：f]
 - ◇（原文を書きうつすことが）実際にやってみたら思った以上に楽しかったのは、きっと過去の経験や知識を引き出しながら、「ああ、この法律はあのトラブルのことだな」などと仕事上の情景を思い浮かべることができたからと解釈しています。[6：IP：h]
 - ◇MTM社のストーリーで学習はスタートしたのですが、現実を考えながら課題に取り組み、MTM社からは離れて考えてしまいました。私自身はそれでよいと思っていますが、（後略）[6：IT：h]
 - ◇学べば学ぶ程に実業務に生かされることを実感しているのである。[6：IT：m]
 - ◇この科目に限って、特に1週と2週は中村部長の指示をまったく確認していなかったことにより、いまさらながら気づきました（面目ないです）。この科目で俎上に載せられていた3者の立場それぞれが、自身が現実に関わっていることなので、仮想より現実が優ったと思われます。[5：IM：D]
 - ◇ストーリーの中で課題をこなしていく方が、実際にありそうな展開の中で、必要な知識を仕事に関連付けて学習でき、自然と自分の中に入っていくのではと思った。[6：収穫：d]
 - ◇現実にある課題をクリアするにはこの知識が必要だという形式で科目を進めていくので私も学びやすいと感じました。[6：収穫：d]
 - ◇実際に使われる場面を想定しながら学習できた。[6：収穫：f]
 - ◇課題が与えられて、その課題をこなすために用意されている科目を有効に使っていくという学習ができたと感じる。[6：収穫：g]
 - ◇中村部長からのタスクとして毎週課題が与えられたが、どの課題もリアリティのある設定で、すべての学習は実際の業務に結びつけることを知らず知らずのうちに意識させられていた。また、この統合型カリキュラム論では、各自の実際の業務に結びつけて考える機会が用意されており、この専攻での学習が「実学」であることを実感できた。[6：収穫：g]
 - ◇課題が現実味を帯びていること／ MTM社員として、具体的な課題・問題解決を図る（学習する）設定になっていることから職場や今後の業務へ活かしやすい、フィードバックしやすいと感じた。ストーリー仕立てで、物語の主人公として課題をこなしていくのはおもしろい（長続き、ペース配分・締め切りを意識させる）と感じた（途中、その意識が遠のくこともあったが・・・）。[6：収穫：k]
 - ◇知識や考え方を学ぶだけではなく、実際の問題解決に業務への取り組みにどのように役立てることができるか、という風に考えることがストーリーに組み込まれているので、なりきることが出来、さらには本当の実業務への活用という視点が早くから持てた点は大きい。[6：収穫：m]
 - ◇提示されるストーリーが、各科目の課題に取り組む際の指針となった。ある事柄に対して、最初から一般論を構築していくよりは、SCCのストーリーで示されるような具体的な状況を想定したほうが思考が組み立てやすかったように思う。[6：収穫：q]
 - ◇MTM社員の立場から、科目を履修するので、実際の現場と科目との関連性を見つけやすい。[6：収穫：r]
 - ◇SCCは社会人でもある私たち学生が、ここで学んだことを実際の業務につなげることを意識させる一つのしかけであると感じました。[6：みんな：g]
 - ◇ストーリーの中で課題が出されることで記憶（イメージ）としても、残りやすいと感じました。→ストーリーの中で自身が体験学習することになります。[6：みんな：k]
- <小分類：e概・IDが実業務とリンクした>
- ◇ARCSモデルや評価チェックリストなどは、教材コンテンツに関わらず社内の会議資料でも立派に使えるものですよ。また、仕事で漫画の制作をするときがあるのですが、シナリ

- オを書いたり、絵コンテを見直したりするときには、A R C S モデルは非常に有効だと感じています。[5 : e 概 : F]
- ◇出来るだけ、自分の仕事につながるように努めて、課題を消化してきたつもりです。そのうちの幾つかは早速仕事に持っているように思います。[5 : e 概 : N]
- ◇長く研修を企画してきたものの、前提、事前・事後などのテストにあまり注力していなかったことに気づかされました。[5 : I D : F]
- ◇ほとんどの教育プロ部ラムはこれに沿って考えれば間違いはないだろうと感じましたし、私の研究テーマでもあるアンケートによる教育効果や講習会の評価にはこの考え方が必要です。[5 : I D : H]
- ◇概論や、教育ビジネス論などで紹介された分析ツールは、コース途中で折に触れて若干改良しながら作りおきしてきましたのでこれを仕事に適用しながらさらに自分のツールにすれば面白いことが起きるだろうと思います。[5 : 収穫 : N]
- ◇私は業務上、e ラーニングを扱うことがあります。ここまでお恥ずかしい話ですが、深く考え振り返ったことがありませんでした。[6 : e 概 : e]
- ◇提供済みのコースに対しての課題抽出は受講者のアンケートから類推して行うことが多く、それ以外の双方向でのやり取りの設計と分析の重要性を改めて認識した。[6 : e 概 : e]
- ◇実際に自分自身がこれまで受けてきた、あるいは行ってきた研修やe ラーニングについて分析する機会を与えられ、それに取り組むことで、課題を明確にすることができるようになった。[6 : e 概 : g]
- ◇たとえば、e ラーニングの評価シートはほぼそのまま職場で使えるものまで作れたのは、時間をかけたからです。[6 : e 概 : h]
- ◇また原因を確定させるために、どのような情報を収集すべきかを的確に判断し、問題解決に導いていけるか、ユーザからの問い合わせ窓口を担っている部署として再確認したところである。[6 : e 概 : k]
- ◇学んだことを忘れないようにするためにも、実践できるようにするためにも、現状を把握し分析することで、ここで学んだことを活かしていきたいと思う。例えば、以下のような付帯的な方策を検討している。(後略) [6 : e 概 : m]
- ◇教育工学関連に関しては、今まで経験と勘で教育を行っていたものを整理しながら、基盤的教育論を速やかに終了することで今後の授業の効率を高めることができると考えます。[6 : e 概 : p]
- ◇特に有意義であったのがB B S 上での他の履修者とのディスカッションと第14回テキストである。これらを通じて、自身の体験を超えた事例についての知識を得ることができたといえる。[6 : e 概 : q]
- ◇しかしながら今では日常の業務を行うときに常にI Dを頭においてから実行するようになった。(中略)しかし、昨年までなら、評価しフィードバックすることなどしなかった。[6 : e 概 : r]
- ◇しかし、教育・検収の企画がある際には、I Dを考える癖がついたように思う。[6 : I D : a]
- ◇教材の責任範囲を決めても遵守できないインストラクタの存在が課題。教え込む気持ちが強い人はこの傾向が強い。[6 : I D : b]
- ◇現場で実践するには実際の業務で意識していくのが一番だと思います。場数を踏んでその後これはもしかしてI Dではと思うような事が出てくるのではないのでしょうか？私も2年の間でぼつぼつと出てきました。[6 : I D : b]
- ◇普段の研修などで、I D理論を通して問題解決の糸口を探るようになった。[6 : I D : d]
- ◇大学案内は手にした人が読んで理解してもらうために作成するわけで、独り立ちができていることが重要であると思われる。しかし、そのような視点で見ると、つまりインストラクショナルデザインIで学んだ視点で見ると、改善すべき箇所は多くある。(中略)これから提案し改善していくやる気がみなぎる思いである。[6 : I D : m]
- ◇以前実施していた研修会を再度行うようになったことがありました。そのとき以前の講義資料の見直しをしたのですが、とても恥ずかしいくらいにならないようになっていて、全てを直すこととなったことがありました。もしかしたらこれが身に付いてきた力なのかなと少し実感

しました。[6 : I D : p]

◇3. コース開発計画書を作成し、ステークホルダごとの着眼点に即した説得力ある提案を行うことができる。(上記のコンピテンシーに対し) 本講義でおこなった、教材企画書の作成はまさにこのプロセスであったといえよう。[6 : I D : q]

◇ID1 は受講したときは、教材作成でしか役立たないものだと思っていたが、実は、新人の実習や OJT に限らず、業務一般で使える。[6 : I D : r]

＜小分類：I P が実業務とリンクした＞

◇私が学生時代、知的財産法ゼミに所属していた頃は、(中略) 正直、インターネットと知的財産法がこれまでに関係が密になるとは当時は思っていませんでした。[5 : I P : C]

◇この科目の学習を通じて身の回りの契約書の内容について改めて気づくこともありました。今後も、著作権は契約といったことで判断に困ることがあったらこの科目に戻ってくることがあると思います。[5 : I P : D]

◇例えば、法律相談のバラエティ番組で、何名かの弁護士の方が、適法が違法かでディスカッションをしています。こうしたやりとりが、法廷でなされているのでしょうか。(少し大げさかと思いますが・・・) 一度、実際の裁判のやりとりを見ることで、知的財産権に関する学習意欲も変わるかもしれませんね。[5 : I P : E]

◇やはり法律はケーススタディがあると、理解しやすい、というか逆にケースが無いと、条文の意味するところが分からないことが多々あります。その意味でも、ストーリー性のあることで学びは深まったと感じます。[5 : I P : F]

◇ネットワーク上の知的財産権及び私権については本当に良く質問や議論になる話題です。これまでは事例ベースでこれは問題ないみたいですよ。というようなトークでかわしてきましたが、この講義を終えた今ではもうそういうわけにも行かなくなりました。[5 : I P : G]

◇事例式の資料は読みやすく、身近に同じようなことがあればその問題が知的財産権のどこに引っかかるのか、というのを思い出せるのではないかと思います。[5 : I P : H]

◇課題は、どれも身近ですぐに発生しそうな(発生している?) トピックでした。そして、とても難しく感じました。実のところ、「こんな難しいことは専門家にお任せしたい、、、」と感じましたが、課題なので、がんばって取り組みました。(中略) (起業した友だちはどうしているのだろうか、いろいろ考えてしまいました。)[5 : I P : L]

◇科目を受け終わった時の感想って、①学習内容がどうだったか②学習方法がどうだったか③教員の人となり辺りに大別される気がします。(中略) 実務にすぐ使えそう! というのが正直な感想です。[5 : I P : M]

◇実際、会社の中で、仕事をごっそり乗っ取られるという事態が発生しておりました。(中略) いったん問題が起こって裁判沙汰になれば、所詮、我々素人考えは” 一笑に付される” 運命にあるということです。[5 : I P : N]

◇Web を利用して関連事項を調べ、自分の常識をたよりに答案を書きました。法的な正しさとはどのようなものか、まだあまりよくつかめていませんが、少なくとも苦手意識は弱まり、教育著作権について興味を持ちました。[5 : I P : Q]

◇ネットワーク上の知的財産権及び私権の課題を作成する際に SCC の物語に助けられました。現実の世界との関連性を考えることで、質の高い課題を作成することができたかと思います。[5 : 収獲 : E]

◇あまり感心を持てていなかった。(中略) 注意しなければならない法律の概要を学習することができ、興味を持つことができた。[6 : I P : a]

◇(先日、仕事上の件で会社の知財部の人間と話す機会があったのだが、会話が成立? していた事に知財部の人間が驚いていた。これも学習効果??) [6 : I P : b]

◇先日、実際の業務で他者のホームページのキャプチャ画像をコンテンツの中で利用してよいかというような課題があったため、解決策を検討する際の参考にすることができた。[6 : I P : f]

◇各ブロックで与えられる課題は、実際の場面で遭遇し得る問題であり、学んだばかりの法律をもとに会社としての対応を検討するのは非常に重い課題ではあったが、(後略) [6 : I P : g]

◇「ネットワーク上の知的財産権及び私権」で学習した課題＝発生したトラブルは、ストーリー

- (MTM社の社員である自身、その自身の業務に直結した内容)にマッチしていて、大変取り組みやすく、面白いものに感じられた。[6 : I P : k]
- ◇ネットワーク利用に関わる法律や倫理的な問題を意識して研修会を設計するようになった。
(後略) [6 : I P : p]
- ◇私がこの科目を学んだ結果一番自分自身の中で変わったなと思ったのは、web ページを見る時に真っ先に Legal notice を見たり、ソフトの EULA を読むようになったりということでした。[6 : I P : q]
- ◇例えばコース内に引用する他者の画像を使用するにあたり、著作権者と交渉し、使用許諾契約を締結するなどといったことを行っていく場面もあろう。例えば初めて e ラーニングを実施するような機関においては、コース中に画像を一つ引用するのも法的な問題が発生するということに気付いていないということも大いにあり得る。(以下、具体的な場面を記述)
[6 : I P : q]
- ◇結果として、職場でのウェブサイトのコピーライドの表記を正しい形でつけたり、チラシ等の作成でフリーのイラストを使う際もその使用についての説明を良く読んで方使うようになった。[6 : I P : r]
- ◇特に、知的財産権の学習など取っ付きにくい課題も現実のストーリーからイメージしやすい工夫が施してあった。[6 : 収穫 : b]
- ＜小分類： I T が実業務とリンクした＞
- ◇LMS と Moodle の区別も付かなかった私ですが、この科目のおかげでスタッフ向け e ラーニングシステムを開発することが出来ました。スタッフの評価も上々です。[5 : I T : A]
- ◇実習そのものより「オンラインプログラム学習支援システム」に感銘を受けました。こういう役にたつシステムを作れたら技術者冥利につきますなあと思います。他にも、VODの実習や、個別に Moodle をセットアップできる仕組みなど、見所が満載でした。[5 : I T : D]
- ◇専門家でない人に伝えるつもりで端的にまとめる作業が、LMS の特徴をより深く考察することにつながったと思います。自分の本職に一番近い科目でしたが、知っているつもりだったのが、とんでもないことだったと気づかされました。[5 : I T : D]
- ◇学部の人に、「情報リテラシー」という授業をうけ、オープンソースが流通する危険性というものを、学習したつもり、でしたが、今回の掲示板で、その重要性を再認識させられました。[5 : I T : E]
- ◇自らが自部門で使うことを想定して作成できたため、実際に自部門へ展開することができました。[5 : I T : F]
- ◇現在、自分の会社の語学サービスの提供方法として、<LMS>活用を検討しています。タイミングよく <moodle>などに触らせていただいたので、これからより深く研究していく弾みになったことの収穫は大きいです。[5 : I T : N]
- ◇日本で流通している LMS のほとんど (中略) を触ったことがあると (勝手に) 自負しているのですが、自分の理想の LMS の姿って何だろうと考えるいい機会になりました。[5 : I T : P]
- ◇HP による CGI の書き方をきちんとマスターして本格的な学生授業評価や授業中の小テストを Web や携帯で実施できるようにすること、そして、ある程度作り込んだコンテンツを Moodle に入れて e ラーニング授業のパイロットに備えること、この2つの課題に夏の休暇をあてたいと思っています。[5 : I T : Q]
- ◇また、課題3では自組織の LMS の構築について検討することができ、当院でも LMS の導入準備を進めているため、実際の業務につながる内容であった。(中略) 業者に依頼するときはこちらの要求に対する相手の苦勞が理解できたり、機能を意識して依頼を行ったりできるようになっていると実感している。[6 : I T : g]
- ◇特に、Moodle を実装し、初歩的な操作を体験することは、自分の限界を確認する場にもなりシステム系のスタッフの協力なしに e ラーニングは実現しないことを痛感しました。
[6 : I T : h]
- ◇また、本学の LMS にも装備されているコラボレーションツール: W i k i (=コンテンツ) や掲示板/Blog (=文脈) の本学の授業での利用状況を把握し、ナレッジマネジメントと融

合でできるような提案（事例）を紹介していきたい。[6 : e 概 : k]

＜小分類：IMが実業務とリンクした＞

◇今回、経営学特論と並行しながら学習を進めていたため、（中略）またそのことが、IMを考える場合に現在の自分の職場での立場と私自身のスキルをもって、どの役割を果たせるのかを具体的に考えはじめています。[5 : e 概 : C]

◇自分でビジネスをしている割にはビジネスに対してネガティブな評価をしている自分に気づかされました。[5 : IM : A]

◇本講義を受けることで、仮想ではありますが、実際に自分がコンテンツを作って売り込む場合に、開発コストや業務を回すために必要な費用を回収するためにどれだけ売らなければ自分で実際計算したという経験が出来たのは非常に大きいと思いました。[5 : IM : C]

◇人材育成にかかる最新の動向等を学ぶことで、自分の組織を客観視する機会となりました。[5 : IM : K]

◇最初は、年商1億円のビジネスなんて、、とと思っていましたが、そう言えば地域の農産物販売で起業して、年商7千万円という高齢女性グループにインタビューしたことがあります。そんなに遠い金額ではないのかもしれませんが。[5 : IM : L]

◇課題の12、13で取り扱った企業立ち上げの計画書については、立ち上げたり、設立する際だけでなく、常に自分の会社や相手の会社を評価する際のものさしとしてポケットの中に忍ばせておくとう有効になりえると感じました。これからの問題は自分の手になじませていくことになります。[5 : IM : N]

◇職員としての立場や悩み、教員との協働の在り方などを考えていくという過程が、私と同じだ！と共感しましたし、インタビューを受けておられた方の「悩み」は、実は、情報部門の職員は誰でも持っているものなのですが、表立って悩みの交換などはしないので、とてもいい機会になったと私自身が感じました。[5 : IM : P]

◇今までは大学教育をビジネスとして見たことはありませんでしたが、これからは大学で様々な事業を考える際にも、否応なしに、SWOT、5つの競争要因、3C、4P、損益分岐点、知覚品質というコトバや概念を意識するようになるでしょう。[5 : IM : Q]

◇計画性も無く、戦略も立てずに、ばいと新しいシステムを導入して、その運用法や政策立案を現場に丸投げするという管理者はどこにでもいるものだなあ、と思いました。[5 : IM : Q]

◇予算が云々とか、自社製品の押し売りとか話のすり替えが信頼できなくなることは実際よくありました。[6 : e 概 : b]

◇プロジェクトマネジメントを行い評価することができた。それによって今まで私が行ってきたスケジュール管理は漠然としていたのが分かった。身近なこと（忘年会）を評価するだけでもそう感じたのだから面白かった。[6 : e 概 : d]

◇看護という狭い世界にどっぷりと浸かっていたということを再度自覚した学習となりました。[6 : IM : a]

◇教育サービス事業者の内容は、ひとつずつ自分の業務に当てはめながら、振り返りをさせていただきました。[6 : IM : f]

◇キャリアに関わる教育は、まさに病院の理念や方針に影響する部分であり、eポートフォリオの導入を進めている現在、この視点は大いに役立っていくと考える。[6 : IM : g]

◇（前略）御社だけではないと思います。弊社でも同じです。[6 : IM : h]

◇「立場変われば、品変わる」とは言われますが、私自身が教育を売る側から買う側に立場を変えて思うに、グッドタイミングだったのかもしれないな、と正直なところ感じます。[6 : IM : h]

◇ビジネスという視点から、取引先である＜教育サービス事業者＞の立場や考え方にたつて（相手側の立場にたつて）、意識して学習することができました。[6 : IM : k]

◇今回はまさに顧客の立場にいる自分が逆に品質サービスを向上させる企業側に立場を置き換え考える作業を行いました。[6 : IM : m]

◇大学事務局の人事担当者としての現在の業務に大変直結した内容の学習で、学習というよりは業務をどのように発展改善していくかを良く考えた。[6 : IM : m]

◇いまも籍は民間企業ですが、職場が大学ということもあって、この科目の言葉を借りれば「お

金の話はやめよう」的発想にとらわれがちでした。しかしこの科目の履修によって、少しですが、eラーニングを支えるIMの視点を獲得できたと思いました。[6:IM:q]

<小分類：改善案等>

◇私は、教育ビジネス事業者で、かつ映像制作会社を経営する立場なので、他の科目より身近に感じられて、取り組みやすかったのですが、正直、教育ビジネス事業者にとってのビジネスについては、新しい視点の獲得や気づきが乏しかったように思います。[5:IM:I]

◇タスクではプログラミングなどかなり個別的な技術的事項を取り扱いますが、課題ではそれを活用した事例を答えさせるようになっています。[6:IT:q]

<<中分類：学習設定・人から学びや気づきを得た>>

<小分類：リフレクションによって>

◇SCCでは、思いつきのような振り返りではなく、系統的に振り返ることができ、それもよかったのではないかと思います。[5:収穫:L]

◇ここで振り返りができたことで、復習と実践という課題が明確になり、モチベーションの高まりも感じている。[6:e概:m]

<小分類：コメント等によって>

◇受講生の大半は、ビジネス経験が豊富なので、事業企画書等大変参考になりました（gsisで授業を受けるメリットです。）。しかし、他の方の企画書のどの部分が優れていて、どの部分に不足があるのか、見極めることが、できずコメントに苦労しました。[5:IM:E]

◇私は、他の方へのコメントを行う際に、考えさせられることが多く、SCCの文脈や、要求された課題など複数のことを考えながら、掲示板にコメントを書き込むのに大変苦労しました。[5:収穫:E]

◇課題に対して自身の考えを表現することが非常に苦手であることを改めて実感している。書けば書くほど、意見や考えの根拠のなさを露呈し、自身が伝えたいことを整理せずに伝えることが多くあったと反省している。[6:e概:e]

◇感想に書かれているように「考えて、自分の意見を説明する」という点、同感です。私も非常に苦労しました。[6:e概:f]

◇実際に自分がeラーニング概論の受講生として、LMSの機能を使うことで、LMSを利用した学習の魅力を感じることができた。特に、掲示板を利用したインタラクションのある学びの持つ可能性を実感している。[6:e概:g]

◇そして「考えて、自分の意見を説明する」普段自分がどれほど考えずに生きていたかを見直すよい機会となりました。[6:e概:p]

<小分類：学びの実感を得た>

◇当時に教材に愛着を覚える一瞬もあり、楽しい経験でした。[5:ID:K]

◇私はeラーニングの経験が乏しく、eラーニングとはどういうものをいうのか？といったところからの学びであった。[6:e概:a]

◇今回、基本的な知識を体系立てていただいた中で集中して学び、その知識を使って課題に取り組んだ結果を評価していただけたことで、はじめて学習したという実感と、完全ではないが身に付いたという実感が得られた。[6:e概:f]

◇学んだ手順を踏めば、説得力のある提案（教材開発）をできそういう自信をもつことができた。[6:ID:g]

◇他の方へのコメントを見ていて思ったのですが、「概論」という科目は網羅性とは別に、その分野をこれから学びたくなるような動機づけの機能も重要なですね。私自身、がこれまでに学生時代を含め受講してきた「概論」系の科目にはなかなかそういう要素が見いだせなかったこともあってか、今回初めて気づきました。[6:e概:q]

<小分類：具体的な方法を実施した>

◇今回提出した課題は、WebCTから印刷した課題を作成したレポートをコピーで1枚にしてファイルし、後々、再確認しやすいようにしました。[5:IP:C]

◇それとともに、学び方を身につけたいという気持ちが高い。知識がないので理解するまでに時間が非常にかかってしまうのは仕方がないのだが、振り返ると、どこをどう理解すればよいのかがわからないために右往左往していることが非常に多いので、学び方の要領やコツ

のようなものを速く自分自身で見つけなければならないと感じている。[6 : e 概 : f]

◇丁寧にノートを作成することが振り返りを促すというメリットも確認できた。このことは業務に活かすことに大変効果があると感じられた。[6 : I P : m]

<小分類：同級生の存在から>

◇書き込みをすることによって、そして人の書き込みを読むことによって、非同期ではあるものの、パソコンのディスプレイの向に人を感じることが出来ます。[5 : I D : A]

◇一体感がある事／ MTM 社の社員という設定が、実際の仕事とかなり異なっているため仮想ではあるが同期入社（入学）の人と仕事を進めている様な感じで面白かった。[6 : 収穫 : d]

◇LMS 的には、ほかの方の学習の進捗状況などを見ることによって、自分もやらないとまずいといった感じになるので、学習者同士でチューター的な役割やチャメールなどの機能を果たしているのかと思った。[6 : e 概 : f]

◇e ラーニングは孤独であると言われていますが、確かに一人で課題に取り組み悩みましたが、オンラインでありながら同期の皆さんをとて近くで感じることができ、不思議と孤独は感じませんでした。[6 : e 概 : p]

◇また凝り固まった自分の考えを、人の意見を踏まえながら柔軟に良いものにしていく作業は大切だと思います。日頃の業務にもこういった事が出来ないかと思います。[6 : I D : d]

◇先生方や受講生の助言、協力者の協力のもと、なんとか教材がカタチになり、嬉しく思う。[6 : I D : g]

◇途中までは他の学習者の方々と励まし合い、助け合いながら進めることができたように思える。[6 : 収穫 : m]

◇確かに、一体感がありました。特に課題をそれぞれの同期が同時期に同じ学習をするので、双方向性がより密になっているように思えます。また、みんな同じ仕事してるんだと思い心強く感じました。[6 : 収穫 : p]

◇セカンドライフ上に MTM 社があるとどうなんでしょうね？バーチャルでも人の影や姿があると少しコミュニケーションや声がけなどまた少し違うのではないかと思えました。[6 : みんな : m]

<小分類：生身の先生から>

◇文章だけでは、先生の方がわから分かりにくいですね。[5 : I P : E]

◇ランチョンセミナーで入口先生の講義をお聞きしてからこの科目に取り組む意欲がわいてきました。（中略）e ラーニングを使いながらのブレンディッドラーニングになり、自分としては納得できた（成果はどうなのかわかりません・・・なんだがピンとはずれな答えばかり書いていたようです>私）科目でした。[5 : I P : P]

<<中分類：SCC がプラスになった>>

<小分類：科目同士の関連を学んだ>

◇学習支援情報通信システム論では、I D I を下敷きにした取り組みがあり、こんな風につながっているのなら、もっと別の選択肢もあったのでは、と少し思ったところが、敢えて言えば、わたしにはSCCの「波風」だったのかもしれませんが。[5 : みんな : L]

◇課題（科目）の関連性など考えながら学習することができた。[6 : 収穫 : a]

◇個々にタスクをこなしていくケースと違い、総合的にまたつながりを持てる事で e ラーニングを立体的に学習できた事が一番の収穫であった。[6 : 収穫 : b]

◇個々の科目の内容が全体として互いにどのような関係を持っているかを把握したうえで学習することができた。[6 : 収穫 : f]

◇「科目の垣根を超える」「ストーリーの中で体験学習する」という点は、今回の SCC を受けて強く印象に残りました。[6 : みんな : f]

<小分類：コンサルパッケージから学んだ>

◇コンサルパッケージは第3者に「SCC ではこんな勉強をしました！」と伝えるときに活躍しそうです。[5 : 収穫 : E]

◇コンサルパッケージは、「自分が教育設計に携わった時にニーズ分析や学習設計などを行う中で、必要に応じて使えるツールをひとまとめしたもの」ということですが、別の場面を設

定して、それに応じて学びをひとまとめにすることもできます。考えてみたいと思います。

[5：収穫：L]

◇一連の課題の成果を結び付けて考えることができる。最終目的（MTM 社業務支援パッケージの作成）のために各課題を振り返った際、（パッケージの中の）位置づけを理解して、ポートフォリオとしても整理しやすいと感じた。[6：収穫：k]

＜小分類：臨場感を感じた＞

◇誰かに評価を受けながら教材を作り上げるという過程はこれまで職場での業務では、望んでいてもしてもらえなかったことで、修正作業は大変でしたが、やりとげたことは自身につながると感じています。[5：ID：C]

◇同じ課題でも MTM の社員として取り組むことで、臨場感があり実践場面でも活用できる学習となった。[6：収穫：a]

◇ビジネスの場で使う文書作成や上司へのメールなどのシミュレーションができる。[6：収穫：r]

◇あと、同期の力が節々に感じる事ができました。ストーリーの中でみんなで仕事をしていると感じましたので大変ですが、とても自分の実になりました。[6：みんな：p]

＜小分類：課題へのヒントを得た＞

◇ID－1では何の教材を作るか企画するところがその後の進行にかなり影響すると思いますが、SCCで中村部長より教材の対象や内容にある程度の枠が与えられたことが、私にとっては教材企画のハードルをすこし下げしてくれる効果がありました。[5：ID：D]

◇中村部長から「新入社員向けの教材」という指示を頂いていたので教材を作る際に、漠然と考えずにすみしました。[5：ID：E]

◇次第に、「困ったときの MTM 頼み」といいますか、課題を作成するときだけ、中村部長のメールを見るようになってしまいました。中村部長のメールや、根本先生の解説を読めば、どんな切り口で課題に取り組めばいいかきちんと示していただいているので、課題へのヒントだと思って素直に受け入れていました。[5：IM：D]

＜小分類：ペースメーカーとなった＞

◇・全体の進捗管理として、SCCの流れを利用する↓・科目に入ったら、SCCと科目を切り離して科目に集中する↓・科目が終わったら、科目で学んだことや成果物をSCCの課題に反映させて提出する [5：e 概：J]

◇SCCのコントロールがなければ、学習に計画性がなくなり、予定通りの科目履修ができないようにも思います。「eラーニング概論」で豊かで実りある「学び」を経験しながら、SCCとの融合をどうするか悩むことがしばしばありました。[5：e 概：Q]

◇遅れずについていくことはできませんでしたが、SCCで示される指示が今期履修科目の学習を進める道標になったことは間違いありません。[5：収穫：D]

◇統合型カリキュラム設計演習を受講していなかったら、前期履修科目のすべてを統合したまとめを行うとは、ずばらな私には、ちょっと考えられません。[5：収穫：D]

◇1週間や3週間で集中して行うことは、ストーリー展開上も、進捗管理上もプレッシャーになって社会人向けにはいいのではないかと感じました。[5：収穫：P]

◇私もそうです。オリエンテーション科目ではペースメーカーとしての効用についても紹介されていたので、私はそこに期待して履修しました。その結果に満足しています。[5：みんな：D]

◇ペースメーカーとしての位置づけとなっていたように思います。[5：みんな：L]

◇多科目を履修するとなると、苦手な科目が後回しになったりということもあるが、SCCにより課題が出されたため、まんべんなく取り組むことができた。[6：収穫：a]

◇自由に取り組めるなかに期限のあるカリキュラムはメリハリがつく事で取り組みやすかった（カリキュラムによっては遅延してしまったが）。[6：収穫：b]

◇複数の科目の学習を並行して進めるためには、通常は自分で計画を立てて進めるしかないが、SCCの場合はそれがあらかじめストーリーとして計画されているので、計画的に学習を進めていくための助けになった。[6：収穫：f]

◇学習のペース配分ができた。[6：収穫：g]

◇スケジュールが科目横断的になっており、学習がスムーズに行える／スケジュールが科目に

依存することなく(A科目が終了してB科目ということにこだわらない＝科目中心ではなく)、課題内容(テーマ)を中心に組み立てられていたと思う。結果的に、4つのIが体系的に、また絡み合って、学びやすかったと感じる。[6:収穫:k]

◇順序に迷うこと無く、体系的な学びを進めて行くことが出来たこと。[6:収穫:m]

◇SCCのペースメーカーがいなかったらおそらくここまで進んで来れなかったであろう。ストーリーの中で提出期限を仮想社員の意地にかけて(間に合いませんでしたが)必死に行う事ができたのもSCCの効率的なシナリオ展開があったからではないかと考える。[6:収穫:p]

◇段階的に順序立てた学習内容となっていたため、自分の気分でやたらに様々な教科を学習するより効果的であった。[6:収穫:p]

◇ペースメーカーを得られたこと／eラーニングで学習をする大学院に入学するという、体験したことのない形態での学習をすすめていく上で、本科目のペースメーカーとしての役割は非常に助けになった。[6:収穫:q]

◇特定の科目をある期間に集中して行うというSCCの授業進行は、一定期間の間集中的に一つの目標に取り組むことができるという点で、学習にも良い影響があったように感じられた。[6:収穫:q]

◇ペースメーカーの役割を果たしている。[6:収穫:r]

<小分類:履修済み科目を見直した>

◇科目履修で受講済みの科目に関しても見直してみると結構勉強になりました(なった気がするという事もSCC効果?)[6:収穫:b]

<小分類:実務と比較して学習した>

◇それと同時に、「こんなレベルでは通用しない」と自問することがしばしばあり、時間やタスクのせいにして、学習の質を落とすことがなかったのも、こうした設定によるところが大きいと思います。[5:収穫:Q]

<小分類:SCCへの取り組み方法を工夫した>

◇現実の世界での業務と、ネット上での業務しかもSCCと科目学習が頭の中でうまく統合出来るスキルがこの「学習の場」には求められていると思います。eラーニングを実行できるある朱のコンピテンシーを考えられませんか。[5:e概:O]

◇・全体の進捗管理として、SCCの流れを利用する↓・科目に入ったら、SCCと科目を切り離して科目に集中する↓・科目が終わったら、科目で学んだことや成果物をSCCの課題に反映させて提出する[5:e概:J]

◇やはり、SCCとの関係で課題をこなすには、普通にこなすのとはまた違う観点や切り口・立ち位置で取り組む必要がありそうですね。[5:e概:P]

◇(前略)と書いてあるとおり、受講生の学習背景によってどうしても違和感が生まれるのは仕方がないところであると自らおっしゃっています。その記述通り、ここの調整にあまり注力してもコストパフォーマンスは高くないと思います。(中略)ともあれ、自分としては、現在のSCCはとても気に入っています。上述したようなちょっとした違和感は、まあ、オトナですから十分対応可能です。[5:ID:A]

◇写経はその目的が何かを自分自身で答えを見つけることも課題のひとつなのかもしれませんね。[5:IP:C]

◇あと、授業を受けているときも、MTMの社員であることをよく忘れます。課題を取り組み頃になって、また、MTMの社員にギアを変えるケースがよくあります。[5:IM:E]

◇SCCでMTM社の新入社員として仕事をしているという設定は、大学教員が学生になりきるためのよい仕掛けとなりました。各科目にのめり込むあまり、MTM社員であることを忘れてしまうこともありましたが、ID1での紙教材作成やIPでの法律問題へのコメントなどはMTM社員という設定であることにより、あまり戸惑いなく取り組むことができました。[5:収穫:Q]

◇私は、入り込めないというより、入り込むことをあえてしなかったかもしれません。自分がMTMにいる姿を想像するより、MTMにいる誰かを上から見ている感じ、が近いかもしれません。[5:みんな:D]

◇マニュアルの説明を読んで何となくわかったような、わからないような部分を釣り入門の大

場君がどうするのかを見ることで、「そういうことなのか!」という気づきが何度も得られました。自分はストーリーの外にいるわけですが、実は自分が大場君になったつもりで疑似体験していることに気付きました。[6:ID:f]

◇辛いながらも『中村部長、それは難しいよ!!』と心の中でいいながら進める事ができるなど、魅力的な学習であった。[6:収獲:p]

◇最初は SCC というものに戸惑いました。特に、科目履修していたこともあり、ストーリーに乗り切れませんでした。そのような時、鈴木先生からコメントを頂き、後半は自らストーリーにつかるぞ!という気持ちで取り組みました。その結果、ストーリーに乗ることも徐々にできるようになりました。自らストーリーに入っていくという気持ちも重要だと思います。[6:みんな:a]

◇本当に遅れ遅れになってしまい。中村部長からは次々業務がくる、社会人向けのコースであると考えます。2つの会社で業務を行っている途中から感じました。[6:みんな:p]

◇課題に追われてストーリーの中にいる事を忘れる事がありました。しかし私の方は、学習に入る前に必ず「業務内容を確認する」から入りましたので、毎回そこでストーリーの中にいる事を認識する事ができました。[6:みんな:p]

<<<大分類: SCC に困難を感じた>>>

<小分類: 同級生との関わりが欲しかった>

◇いろいろな業界・業種・職業的バックグラウンドを持つこの専攻ならではのバラエティを期待されていたのかもしれませんが、我々全員 MTM 社の社員なので、そう個人的経験に基づくことばかりも書けないこと、また、締め切りがタイトな中で、その豊かさがあまり活かせなかった点で多少「無理やり感」を感じました。[5:収獲:P]

◇>「タイムスケジュール(時間管理)をしっかりとやれ」と叱咤激励してくれる先輩がいたり、泣き言や愚痴を聞いて>くれ、「がんばってるのね」と励ましてくれるでも、締め切り間近で気が遠のきそうになっているときなどは、やっぱり、そういうメンターがいて欲しいと思ったりします。[5:みんな:A]

◇このどちらも今期の SCC では自分の中でうまくできていなかったことになります。ID-1 や教ビでのグループワークで十分に議論し理解を深め合うような行動ができていなかったと思いますし、今期を通じて痛いしっぺ返しをくらうようなこともありませんでした。よく言えば平穏無事に息災で過ごせてよかったのですが、SCC 的にはもっと波乱万丈なほうが学びは大きいのでしょうか。[5:みんな:D]

◇専攻掲示板以外のソーシャルネットワークで会話を補完していた・・・というのは言い過ぎですが、授業内外でのコミュニケーションの少なさが学習者としての気がかりではあります。[5:みんな:P]

◇私も締切に追われて議論を深められていないなと反省しております。[6:e概:g]

◇もう少しみなさんとあーだこーだいいながら、様々な考えや意見に触れ、アドバイスを受けながら勉強できると思っていましたが予想以上に大変でした。じっくり考えて、他人の考えに触れ、フィードバックできたほうが充実した内容の課題(提出物)が完成するのではと不安に感じました。[6:e概:k]

◇喫茶室やMTM分室をもう少し活用できるよう時間を作りたいと思いました。[6:ID:b]

◇コース全体で共通の掲示板を設置し、みんなで相談できる場があると良いと考える。[6:IT:g]

◇私も MTM 分室を効果的に使えなかったのは残念に思っています。[6:みんな:g]

◇現実の社会で納期に遅れそうであったり、求められている期限に遅れそうな場合は、上司に相談したり、するであろう。ここでは MTM 分室を使えばよかったのであろう。しかし、私は上手く使えなかった。[6:みんな:m]

<小分類: 課題と科目の関係が捉えられなかった>

◇タスクが、MTMの業務なのか、eラーニング概論の学習なのか、それは地続きなのか、頭を切り換えてやるべきなのか、混乱していました。[5:e概:D]

◇SCC 全体を通して、シナリオへの没入感が少し足りなかったと思います。どうしても科目

の課題のインストラクションに引きづられて、本来のシナリオに戻れないことが多く混乱しました。(中略) もしくは各科目は虎の穴”のような特訓の場として捉え、レベルアップした私”が MTM 社に戻ってきて課題を解決するような切り分けの方が良いかもしれません。

[5:みんな:G]

◇しかし、ストーリーがまだまだ骨身にしみるほどのストーリーではないような気がします。つまり、それぞれの科目中心のカリキュラムがあって、それを後付でストーリー中心に再構成したという感じをまだ受けます。端的に言えば、科目ごとのカリキュラムとストーリーがせめぎあっています。そのせめぎあいを意識させない工夫が実現すれば強力なビジネス・コンテンツが生まれてくると感じます。[5:みんな:N]

◇一つ心残りだった点があります。それは今一つ役に入り込みきれなかったということです。目の前の課題をこなしていくので必死になってしまってそこまで余力がなかったのかと反省する次第ですが、これには SCC と各科目とのつながりが一方通行気味ということもあったかと思いました。つまり SCC の側から各科目へのつながりはしっかりしていたのですが、それに比べると各科目の側から SCC へのつながりが弱かったように思うのです。各科目のタスクや課題に没入してしまうと、それでいっぱいいっぱいになってしまって、そこから SCC の存在が見えにくくなってしまうような気がしました。[6:みんな:q]

<小分類:ペースメーカーにならないときがあった>

◇SCCのように1つの科目を集中的連続的にやるとなると、どうしても課題作成・提出、コメントのやりとりが即日というわけにいかず、書き込みや貼り付けをするタイミングがずると遅れてしまいます。[5:ID:Q]

◇それだけにこの科目に関してだけ言えばSCCのタイトなスケジュール設定は若干厳しく感じた。(他の科目も含めた観点でいえばSCCのテンポの良い締切設定はペースメーカーとして大変役にたったが)[6:ID:q]

◇MTM社員として課題に取り組みましたが、ペース配分が厳しかったです(SCCでなくとも厳しかったとは思いますが)。社員として、仕事の期限厳守は当然のことであり、締め切りを守ろうと努力はしたのですが、「超過」と表示されることも多くありました。[6:みんな:a]

<小分類:既習済み科目があったので乗れなかった>

◇科目履修していた科目がSCCに含まれていると、SCCに乗り切れないところがあります。[6:IP:a]

<小分類:実務と比較して至らなかった>

◇やはりeラーニング概論を学習して理解したつもりになっているレベルと、SCCでのMTM社の中村部長の指示に従って、仕事に応用するレベルとでは、大きな隔たりがあるように感じ、冒頭からやや落ちこぼれております。[5:e概:I]

◇eラーニング概論は楽しかったのですが、MTM社との絡みが難しかったです。(中略) eラーニングそのものには「やりがい」を感じましたが、MTM社社員という設定への取り組みは「不本意」な部分がありました。[5:e概:L]

◇当初はSCCの要求に沿う企画を思いつくことができませんでした。新入社員とか内定者とか、わたしにとってはそれほどリアルな内容ではなかったからです。(もっとも仕事であれば、自分にとってリアルでなくても、考えつく必要はあるでしょう。しかし、それで本当によい教材が企画できるかというと、それはまた別問題だと思います。)[5:ID:L]

◇なんと言っても、納期を守れなかったことは決定的です。翻訳が私の業務の一つでもありますので、納期遅れは信用の失墜です。翻訳の世界では、例え質がどんなに良くてもノーベル賞級であったとしても納期に遅れればアウトです。翻訳者の中には質にとことんこだわって納期踏み倒しをする人がいますが、弊社ではこんな人は即刻クビ。ということで私自身が私のクビを切ることになっています。[5:ID:N]

◇ビジネスの分野が違えばまったく想像もできないので、中村部長にたしかなレポートを送ることができたかどうかは定かではありません。[5:IM:H]

◇MTM社員としてのタスクについては自分の思い込みが強く果たして利益を出せるレベル、内容になっていたか疑問が残ります。[5:IM:K]

◇「その資料を見て「ここではこの技術を使おう!」と即断できるようにしたいのです。」と

いう一文です。たぶん私のレポート内容や実習内容では、「即断」できないのではないかなと感じました。[5：収穫：P]

◇今は民間企業に籍を置いていないので、どこか第三者的な視点で「あー、企業ってこうなんだ」という気持ちで見えていたのですが、自分の会社員時代はもっと生々しい(?)やりとりがあったと思います。[5：みんな：P]

◇ただし、自分がMTM社員だった場合は、このような姿勢だと営業担当者としては失格かもしれない。[6：IM：r]

<小分類：SCC 設定への適応が難しかった>

<小分類の下：役に徹する困難>

◇SCCの課題を出すときだけ、うまくMTM社員になりきることができればよいのと思いますが、精神的に追い詰められているとなかなかそうした切替ができません。[5：e概：Q]

◇私は、現実世界のお仕事(学会の手伝い)が増えると、没入感が減少しました。[5：みんな：E]

◇課題提出期限が過ぎて「炎上」しているときにSCCをやるときは、いらっときていましたが、そうでなければ結構楽しんでいました。[5：みんな：Q]

◇ストーリー役に徹することができなかった(課題の提出が中村部長宛でないものが多かったような・・・)[6：みんな：b]

◇課題に追われていくにつれてSCCの設定を読まずに進捗状況から科目を進めるようになってしまいました。科目には取り組めるので問題なかったのですが、「そういえばSCCではどんな設定だったのだろうか・・・」と後追いで見る事がありました。計画通り行えていれば問題なかった事ですけれど。[6：みんな：d]

◇SCCでは、業務ではなく家庭の状況と自分の意志の関係で、なかなか思うように課題やタスクが進められず、結局前提となるストーリーなどよく頭に入っていない状況でとにかく各科目のタスクに取り組むというスタンスになってしまった。[6：ID：m]

◇初めはSCCに沿って学習を進めたが、だんだんと課題が消化できなくなるにつれSCCの設定を考えなくなってしまった。[6：収穫：d]

◇最初は、SCCを体験してみようという気持ちも強かったですし、め切も守ろうと必死でしたし(後半、周回遅れ気味になってからも守ろうという気持ちは持ち続けていましたが・・・現実(^^;)、実際にストーリーもやりがいがありましたので、どっぷり浸かって中村部長にレポートを書いていました。しかし、後半は前半と比較すると、だんだんとSCCから離れて行ってしまった感じがします。その理由としては、め切から(勝手に)解放されてしまった結果、ストーリーからも解放されてしまい、ストーリーと現実がかけ離れてしまったことや、SCCがなくてもこなせる科目が増えたこと、などがあるように感じました。[6：みんな：f]

◇私は最初のうちはストーリーに乗れていたのですが、途中で脱落です。[6：みんな：g]

◇私もストーリーの役に徹することが出来なかった一人です。きっと中村部長(架空ですが)あきれられていたと思えてしまい、情けない気持ちに何度もなりました。。[6：みんな：m]

<小分類の下：役の弊害>

◇他の方も書いていますが、MTM社員としての自分と、各科目毎に自分の役割分担、学生としての自分、まだ混乱を来しており、中々解決いたしません。[5：e概：A]

◇MTM社の業務については、やりがいがありましたが、まだ達成感を感じられないです。また、業務としては、中村部長から見て、いわゆる同級生は同僚なのか、仮想と現実の領域があいまいで、どっちにいいのか良く分からない場合があります。[5：e概：G]

◇タスク・課題のページにある指示だけを見て提出してしまい、後から中村部長の指示を満たしていないことに気づいて焦る・・・ということが幾度かありました。(中略)普段、仕事の指示や依頼を受ける場合、「自分がその仕事をやる意義」や「組織への貢献度」を理解することで、俄然その仕事へのやる気が起きるのですが、やはり架空のメッセージだと、そのあたりの気分が盛り上がりづらいです。(後略)[5：e概：I]

◇「迅速」を尊ぶMTM社の企業の論理と、「深い学び」や徹底的な探求(研究)の場である

べき大学教育の論理とは、相反するように思われます。こうしたジレンマは、S C Cの「なりきり」学習によって助長されるように思われます。[5：e概：Q]

◇「役」を演じることで、感情の制御が働くと同時に、自分個人の経験から出てくる思考まで制御されてしまったのかな、と思ったりしています。[5：収穫：P]

◇企業とはいえ、人と人との付き合い、会社と会社との付き合い、信頼関係に基づいてビジネスが進んでいくのですが、このストーリーで出てくる信頼関係というのは、どこか「じゃ、君、やっというてね。頼むわ。」という丸投げ的なストーリー展開のように感じられました。
[5：みんな：P]

<小分類の下：弊害・困難（その他）>

◇無理やり感については、これまで後期開講だった「教育ビジネス経営論」が前期に入ってきていること、ビジネスチャンスやeラーニング出展社が減る、大学が・・・等々の話が出て来て、「MTM社の本業って何だったかな」と混乱してしまいました。また、もともと基幹事業であるeラーニングの事業部を新規に立ち上げる意図がちょっとわからなかったこともあります。[5：収穫：P]

◇S C Cが現実にならなげようと思えば思うほど、そこには大きな壁があるようにも感じます。
[5：みんな：A]

◇今回 SCC を体験して感じたことはただ一つ、置いてけぼりになってしまったという寂しさでした。[5：みんな：C]

◇半年の間、常にストーリーに没入するのは、なかなか難しく、科目事に、ストーリーが細分化されてもいいのかなと思いました。[5：みんな：E]

◇ただその反面、自身で強い問題意識を持っている分野などでは、SCC のストーリーに縛られて思うような課題を提出することができないという面もあった。（例えば私は大学教育に興味がありますが、ストーリー上企業内教育を扱わなくてはならない場面などがあった。）
[6：収穫：q]

付録 C アンケート項目と結果の詳細

<アンケート項目>

◆ブロック1◆ あなたの基本情報について教えてください。

- 01) お名前（あるいはハンドルネーム）
- 02) 性別
- 03) 就業経験年数（だいたい年数をお書きください）
- 04) 仕事（選択毎にさらに下記の質問にもお答えください。）

◆ブロック2◆ SCC〔前期〕を選択したかどうかについて教えてください。

- 05) SCC〔前期〕を選択しましたか？

◆ブロック3◆ あなたと SCC〔前期〕・科目内容との距離を教えてください。

- 06) SCC〔前期〕に取り組んだのはいつですか？
- 07) SCC〔前期〕以前に科目履修で学習した科目を教えてください。
- 08) SCC〔前期〕へはどのような期待を持っていましたか？
- 09) SCC〔前期〕で取り組んだ科目の中に、そのときの自分の仕事などとの関係の深い科目がありましたか？
- 10) SCC〔前期〕学習中の仕事などの状況は、SCC〔前期〕で与えられた状況と似ていましたか？
- 11) SCC〔前期〕学習中の仕事などで果たしていた役割は、SCC〔前期〕で与えられた役割と似ていましたか？
- 12) SCC〔前期〕で与えられた状況や役割は、全体として、その時に行っていた仕事などと近く感じられるものでしたか？

◆ブロック4◆ あなたの普段の仕事などのやり方と SCC〔前期〕との関連について教えてください。

- 13) SCC 以外の一般的な課題を解決する場合、どのような方法をとることが多いですか？
- 14) それは SCC〔前期〕学習中にとった方法と同じですか？
- 15) 手に負えないと感じられるような課題は SCC〔前期〕にありましたか？
- 16) 新しい方法を試すことはよくありますか？
- 17) SCC 以外の一般的な課題を解決するとうれしく思うことがよくありますか？（解決後の気持ち）
- 18) SCC〔前期〕における課題を解決したときはどうでしたか？
- 19) SCC〔前期〕において課題を解決したときに、選択肢以外の気持ちがあれば、お書きください。
- 20) SCC 以外の一般的な課題を解決するプロセスをうれしく感じることはよくありますか？
- 21) SCC〔前期〕での課題解決プロセスはどうでしたか？
- 22) SCC〔前期〕での課題解決プロセスで、選択肢以外の気持ちがあれば、お書きください。

◆ブロック5◆ あなたの SCC〔前期〕への印象などについて教えてください。

- 23) SCC〔前期〕の学習を始めたとき、どんな印象を受けましたか？
- 24) 学習を始めたときの印象について、もう少し具体的に教えてください。（一言で結構です。）
- 25) SCC〔前期〕の学習を終えて、SCC〔前期〕についてどんな印象を持ちましたか？
- 26) 学習を終えた後の印象について、もう少し具体的に教えてください。（一言で結構です。）
- 27) これまでに SCC〔前期〕と似た学習経験がありますか？

◆ブロック6◆ SCC〔前期〕で学んだことが、現在にどう活かされているかを教えてください。

- 28) SCC〔前期〕で学んだことは現在の仕事（仕事以外でも）に活かされていますか？
- 29) 何が活かされているかを教えてください。
- 30) 活かされている内容について、もう少し具体的に教えてください。
- 31) SCC〔前期〕について、または、このアンケートについて、書きたいことがあればなんでもをお書きください。

<アンケート結果>

02)性別

	女性	男性
	2	10
	3	3
合計	5	13
%	27.8%	72.2%

03)就業経験年数

	30
	28
	28
	25
	25
	23
	20
	20
	18
	15
	15
	13
	12
	11
	11
	7
	7
	6
	0
平均	16.53
最大値	30
最小値	0
偏差値	8.57

04)仕事

	企業・学校などに勤めている	自営	勤めなし	その他
	11	0	0	1
	7	0	0	0
合計	18	0	0	1
%	94.7%	0.0%	0.0%	5.3%

04-1a)業種(自由記述)

大学／ソフトウェア業／人材サービス／電機メーカー／教育／医療関係／製薬会社
 マーケティング部学術企画 G／教育サービス／教育、研究、管理、社会貢献／
 大学／IT／情報処理サービス業 14 年, 大学 9 年／医療／システム開発、コンピュー
 タ専門学校、高校教育／公立学校／IT 教育業界／IT 研修／教育

04-1b)職種(自由記述)

事務／大学向けコース管理システム導入・運用・保守に関するシステムエンジニア／営業／事務 管理職／事務(企画・マーケティング)／臨床工学技士／企画及び営業サポート(教育含む)／ソリューション営業／教員、大学教育調査研究部門スタッフ／教員／研究職／システムエンジニア／教員、医師、研究／情報処理技術者、教員／公立高校教員／現営業、元講師・教材開発者／幹部社員／品質保証

05) SCC 選択

	いいえ	途中でやめた	はい
	1	3	8
	1	0	6
合計	2	3	14
%	10.5%	15.8%	73.7%

05-1)「いいえ」の理由(自由記述)

- ・ SCC を構成する科目のうち、科目等履修生として事前に一部単位取得済みであったため
- ・ 二期生でしたので、まだ選択できず、でした。

05-2)「途中でやめた」の理由(自由記述)

- ・ 履修中に入院し、課題に取り組むのが大幅に遅れたため。
- ・ 科目等履修の経験が無い状態での1年次だったため、FULLで単位を取りつつSCCに取り組むのは大変すぎた。
- ・ 1、ワクワクしなかった 2、通常科目とスケジュールが2種類になり、煩雑であった 3、普段の仕事に近い前提条件設定であった為、特に設定そのものからは新しい学びを感じなかった。

06)時期

	2008	2009	2010	2011
	1	0	7	3
	3	3	0	0
合計	4	3	7	3
%	23.5%	17.6%	41.2%	17.6%

07)履修済み科目(割愛)

08) SCC への期待

	今まで知らなかった学習方法が学べそうだった	ペースメーカーとして利用できそうだった	必修科目をまとめて学習できそうだった	ストーリーが現実の仕事などに応用できそうだった	その他
	10	5	4	3	3
	4	2	0	0	2
合計	14	7	4	3	5

08-1) 期待「その他」(自由記述)

- ・ なんとなく面白そうだ。
- ・ SCC の効果について興味があった
- ・ 実業務への応用ができるかどうかを自分自身が体験したかった
- ・ 未経験の職種 (IT 系会社の開発スタッフ) を疑似体験できると思った
- ・ ストーリーが学習の動機づけになればよい。
- ・ おもしろそうだった。
- ・ 依頼される仕事のシーンをクリアするために、今学ぶ科目がそれをクリアできること

10) 状況は似ていたか

	似ていた	似ていなかった	どちらとも言えない
	3	6	2
	2	4	0
合計	5	10	2
%	29.4%	58.8%	11.8%

10-1) 似ていた点など(自由記述)

- ・ 「学習中の仕事のなどの状況」の意味がよく理解できません。「SCC の学習期間中に携わった現実の仕事・役割の状況」と理解し回答しました。
- ・ 期限が迫ってきているかんじ
- ・ 業務内容、業務環境など。全く同じではないが、相似度は高かった。
- ・ (かつての仕事と) 厳しい競争の中、より効果効率魅力的な e ラーニングを提供していかなければならない、という点で。
- ・ I T 教育企業の中堅メンバーであれば、ほぼそのまま適用できます
- ・ 顧客から何かと e ラーニングの効果を求めらる点

11) 役割は似ていたか

	似ていた	似ていなかった	どちらとも言えない
	3	6	2
	2	4	0
合計	5	10	2
%	29.4%	58.8%	11.8%

11-1) 似ていた点など(自由記述)

- ・ 研修企画の仕事をしている点
- ・ 業務内容、業務環境など。全く同じではないが、相似度は高かった。
- ・ 収支マネジメント、コース企画・開発、システム設計・運用、受講者フォロー
- ・ 営業でもあり、開発者でもあったので、どちらの文脈としても対応していました
- ・ 提案から実装までする点

12) 近く感じられるものだったか

	はい	いいえ	どちらとも言えない
	4	4	3
	2	4	0
合計	6	8	3
%	35.3%	47.1%	17.6%

12-1) どんな風に近く(自由記述)

- ・ 協業のコンテンツベンダー等の仕事を想像していた。
- ・ 業務内容、業務環境など。全く同じではないが、相似度は高かった。
- ・ ミッションや与件がほぼ同じであった。
- ・ 経験があるものが多かったため
- ・ 導入効果に始まり、提案から提供までを求められること

13) 一般的な課題の解決方法

	インター ネット・本な どを調べる	そのことに 詳しい人間 く	身近な人(上 司や同僚な ど)に聞く	何度もやっ てみる	誰かに代わ りにやって もらう	その他
	11	7	8	6	2	0
	6	4	3	2	1	1
合計	17	11	11	8	3	1

13-1) 課題解決方法「その他」(自由記述)

- ・ 「SCC 以外の一般的な課題」が具体的にわかりませんでした。「現実の仕事上の課題」と理解して回答しました。
- ・ 図を書いて問題点を分析・整理する。また、何かおかしいな、という直感を記録する。

14) SCC と同じか

	同じ	違う	アレンジした	その他
	8	2	0	1
	4	1	1	0
合計	12	3	1	1

14-1) 方法「その他」(自由記述)

- ・ 詳しい人に聞く、身近な人などに聞く、誰かに代わりにやってもらうは実行していません。クラスルームでの授業だったらそうする可能性があります。「誰かに代わりに・・・」はないと思いますが。

15) 手に負えない課題

	あった	なかった
	6	5
	2	4
合計	8	9
%	47.1%	52.9%

15-1)「あった」場合の方法

	それまでと同じ方法	それまでとは違う方法	それまでの方法をアレンジした
	2	1	3
	1	1	0
合計	3	2	3
%	37.5%	25.0%	37.5%

16)新しい方法を試す

	いろいろ試してみる方だ	何にでも応用できる方法を持っているので必要ない	その他
	9	0	1
	6	0	0
合計	15	0	1
%	93.8%	0.0%	6.3%

16-1)新しい方法「その他」(自由記述)

- ・ 必要な時間を確保するために課題の取り組みを先送りした。
- ・ 違う専門職に聞いてみる。
- ・ 何かおかしいと感じたことを記録して整理・分析する。

17)解決後の気持ち

	うれしい (充実感・達成感がある)	あまりうれしくない (充実感・達成感はない)
	10	1
	6	0
合計	16	1
%	94.1%	5.9%

18) SCC の課題解決

	うれしかった (充実感・達成感があった)	あまりうれしくなかった (充実感・達成感は無かった)
	9	2
	6	0
合計	15	2
%	88.2%	11.8%

19)SCC における課題解決「その他」(自由記述)

- ・ 解決できたことよりも、解決されたことに対する好意的なフィードバックがあることのほうがうれしく感じる。
- ・ ノルマを達成したという達成感もあるが、やはり、学ぶための課題なので、何らかの学び・気づき・発見があった楽しさがあります。
- ・ 疲れた

- ・ SCC に抱いていた期待やイメージとはかなり異なりやや失望した
- ・ 「知恵」が増えた（うれしかったに包括されるかも）
- ・ 形容詞が多い文章を書くことに抵抗があったが、自分の方を矯正した。
- ・ 自分が作成した課題が目標に達成したのかどうか、今ひとつはっきりわからないことがあり、戸惑った。

20) 一般的な課題解決のプロセス

	うれしいことが多い（充実感がある）	うれしくないことが多い（面倒に感じたりする）
	11	0
	4	2
合計	15	2
%	88.2%	11.8%

21) SCC の課題解決プロセス

	うれしかった（充実感があった）	あまりうれしくなかった（面倒に感じた）
	7	4
	4	1
合計	11	5
%	68.8%	31.3%

22) SCC の課題解決プロセス「その他」（自由記述）

- ・ 解決できたことよりも、解決されたことに対する好意的なフィードバックがあることのほうがうれしく感じる。
- ・ 普段はあまりやらないアプローチ、プロセスがあり、しかも基本的で手間がかかることが多く、想定以上の時間がかかることに焦りといらつきがあった。
- ・ 20)、21) の質問主旨を正確に把握出来ている自信がありません。
- ・ 今になって思えば、もっといろいろ利用できた機能があったのに、利用しなかった。機能を使えばもっと楽しく学習できたと思う。
- ・ 何度もディスカッションすることにより他人のものの感じ方・論理の展開のしかたがわかるようになり参考になった。充実感があるものもあれば、ないものもあったように思います。ないといっても、面倒なわけではありません。

23) 学習を始めたときの印象

	楽しく感じた	快適に感じた	戸惑いを感じた	不快に感じた	その他
	2	4	5	2	0
	2	2	3	0	0
合計	4	6	8	2	0

24) 学習開始時の印象：具体的に（自由記述）

- ・ 新鮮
- ・ わくわくした
- ・ MTM 業務と学習のつながりが自然だと感じにくかった
- ・ いきなり IT 上でのコミュニケーションに親和性の高い人を演じなければいけないプレッシャー
- ・ 全体像が見えず、何をどの程度取り組めば良いのかが分からず、不安のまま過ご

- した。
- ・ あれ、どうやっていけば、よいだろう??
 - ・ わくわく
 - ・ 面倒くさいのが1個増えた。
 - ・ eラーニングがマイペースでやれるものという期待が裏切られた気がした
 - ・ 社会人の学びのための環境設計とは、こういうことを言うのだなあ！（自分の仕事に完全フィットしていたからかもしれませんが、）
 - ・ ストーリーはさておき、とにかくストーリーに沿って行けばいいだな！
 - ・ 会社に勤めたことがなかったので、会社はこんな感じなのかな？と疑似体験できて楽しく感じられた。
 - ・ ビジネスをというわりには、プロセスがビジネス的でないと感じた。
 - ・ 実際の利用場面を想定して学習できている
 - ・ 仕事を通じ、そこで出会う課題をアカデミックな理論等で解決していける充実感があつた
 - ・ 休憩室？や相談室？といった、フリーディスカッションや相談ができる場の使い分けがわからなかった。また相談内容が現実世界のどなたに公開され、どなたがご対応くださるのかがわからず、戸惑った。

25) 学習を終えたときの印象

	楽しかった	快適だった	戸惑いが続いた	不快な感じがした	その他
	3	2	4	1	2
	2	2	1	0	2
合計	5	4	5	1	4

26) 学習終了時の印象:具体的に(自由記述)

- ・ やっと終わった。
- ・ やりとげた
- ・ 慣れた
- ・ 途中で辞めることになったので、残念だった。
- ・ 学習するという意欲、もしくは動機があれば、SCCのストーリーなどどうでもよいと感じた。
- ・ 結構、追われているかんじがした。
- ・ あせり
- ・ チームでタスクをやっていくことの困難さを痛感した、苛立ちも大きかった
- ・ 個々の課題・taskに取り組むのに与えられた時間（1週間）が適切であったか？
- ・ ストーリーはともかく、複数科目を効率よく学習ができたな！
- ・ もっと続けたかった。
- ・ いろいろな考えがあると分かった。先生のコメントは励みになった。
- ・ 一通り学べた充実感はあつた
- ・ 調べたこと、学んだことが業務に通じた納得感
- ・ 面白い一面もあつたが、自分のペースで学習を早く進めたり、じっくりやり込むことができない面があり、その点は残念であつた。

27) SCC と似た学習経験

	あった	似たような経験があった	なかった
	2	4	4
	0	1	5
合計	2	5	9
%	12.5%	31.3%	56.3%

27-1)あった・似ていた場合(自由記述)

- ・ ロールプレイングに似ていると思ったが、状況そのものを学ぶ点と、学習効果を高めるために状況が用意されてる点が、違うと思った。
- ・ 何かの役を演じながら学習をする点。(英会話のよう。)
- ・ 役割とタスクを与えられて、自主的に学ぶところ
- ・ 色々な内容の業務をこなすところ
- ・ 疑似 PBL 型の研修。
- ・ マネジメント教育のケーススタディ
- ・ P B L の学習手法と似ていると感じます

27-2)なかった場合(自由記述)

- ・ 細かな役割・会社の話など(文脈)
- ・ 科目とリンクしているところ
- ・ ストーリーがあったのでその点は、楽しめた
- ・ ストーリーが面白く、リアリティがあり、強いコミットメント感が得られた。
- ・ 複数科目を細切りにする。それにストーリーをかぶせ、なんとなく一体感がある。
- ・ ストーリーのなかに学習が組み込まれている。
- ・ 現実の仕事上のプロジェクトを発足するとき、ほとんど自分一人ですぐどうするか考えなければいけない場面が多かったが、S C C での学習により人の考えを学ぶ・学習する方法がわかってきた。
- ・ ストーリーで学んだこと長期間に渡って、仮想の設定の中、仮想の役割を演じながら、他の役割を演じている学習仲間や先生方とやりとりする点は新しかった。

28)現在の仕事(仕事以外でも)に活かされているか

	はい	部分的には生かされている	いいえ	どちらとも言えない
	4	4	1	2
	2	4	0	0
合計	6	8	1	2
%	35.3%	47.1%	5.9%	11.8%

29)何が活かされているか

	内容が活かされている(eラーニング教材を作ったなど)	方法が活かされている(I D の枠組みを使って仕事をしているなど)	その他
	6	8	1
	5	6	1
合計	11	14	2

30)活かされている内容について(自由記述)

- ・修士論文の開発物に活かされている
- ・マニュアル作りや研修のプランニング、修士論文
- ・手順書やマニュアル等の作成には ID- I の経験が活かされていると思う。新規ビジネスを考える勉強会に参加していて、教育ビジネス経営論で学んだ用語や手法が活かしている。
- ・フォーマット（チェックリスト、企画書・報告書の項目）などを仕事用にアレンジして活用している。
- ・IT、ID、IP、IM について得た知識・技術を会議や仕事に生かした。
- ・ケースベースで学習の動機づけ（関連づけ）をさせている、など。
- ・学部内での LMS 運営全般
- ・SCC のような教材を作ってみたいけど、それは実現していない。ID は応用しているが、これは SCC だけから学んだことではない。
- ・教材やアンケートを作成するときに参考にする。
- ・仕事上の振る舞いが、経験則だけでなく、理論背景を持って対応することができるようになった。
- ・顧客を説得するため理論負けしない
- ・分析のフレームを活用している。

31)書きたいことがあればなんでも(自由記述)

- ・「こんなものを作る予定です！」みたいなものがあれば、答えやすかったです。
- ・私は同期生の中では SCC を楽しんだほうだと思います。MTM 社員になりきって学習するのが楽しかったです。
- ・ところどころ、言葉の意味合いが分からず想像して答えました。たとえば、「学習中」は前期通してのことなのか、課題に取り組んでいる時間なのか、パートタイムで学習しているだけに、どうとらえてよいか迷いました。アンケートの設問の書き方は難しいですね。論文の執筆、頑張ってください！
- ・SCC は、楽しい反面、厳しい部分も持ち合わせている。／社会人向けであるというよりかは、学生に社会人へ向けての練習のような形で取り組ませることも有効であると感じた、逆に社会人にはダブルワークのようで厳しいのではないかと感じたが、やり始めるとめまぐるしい中で進んで行って気がついたらタスクが終わっていたという感じで、予定をコントロールするペースメーカーであるという意味では、いいと思う。／先輩へ、特別研究がんばってください。
- ・まず、最初のところで会社や事務職の経験者の業務定型メールの書き方をみて感心した。次に、課題（タスク）が実践的なものであったので、総合力・応用力を試されていると思い、本気で取り組めた。また、素の自分（大学教員、中堅管理職）で取り組むのは若いクラスメートたちに「大学教授でもこんな程度しかできないのか」と思われるのではといった抵抗があったが、M 社の新人という「仮面」が与えられたので、それになりきることで、不得意な科目についても羞恥心に苛まれることなく、「できないままの自分」を平気でさらけだしながら課題に取り組むことができた。こうした点は評価できるが、「相互コメント」などのチーム課題には大いに苦労させられた。とくに、タイミングが悪く第2グループに配属され、あまり学習意欲が無く、課題提出が遅れがちなメンバー（しまいにはドロップアウトした）と組まれ、混乱と葛藤を経験させられる破目になり、SCC どころか GSIS に対して失望し、GSIS の事業が学生をモルモット扱いしているのではといった不審感さえ湧き上がり、その後（後期）の学習意欲を著しく低下させたことは確かであり、至極残念なことであった。SCC でもなんでも、e ラーニングは仕事をもつ職業人・社会人でも無理なく、快適に学べる教育プログラムだという思い

込みが間違っていたことに気がついたことは、ひとつの学びであったが、実に痛みの伴う教訓であった。／シャンクの GBM のように、もっとスリリングで、なおかつ、実践的なコンテンツであっても、グループ学習をする必要のない、self-paced learning を作り上げることはできると思う。問題は、成人学習理論にこだわりすぎて、不必要なチームタスク（それも SCC の業務とは無縁としか思われない）を無理強いするプロデューサー側の勘違い（誤った信念）にあるのではとすら考えている。／アドベンチャーゲームのような SCC を作り上げることは多分、それほどコストをかけずにできるだろうし、もしチームタスクを与えるのであれば、他の学年（M2）や課程（D）の院生を雇い、彼らに営業先の担当者や上司の役を疑似的に演じさせ、M1（新入社員）をサポートしたり、わざとトラブルに巻き込ませたりといったシミュレーションも可能だと思います。／私は看護教員と組んで、看護学生に模擬患者とのインタラクションをいくつかのシナリオでさせるような教材を開発したことがあります。医療従事者（医師、看護師教育、理学療法士）をめざす学生への臨床実習ではそうした生のシミュレーションは正規の科目となっており、かなりしっかりしたプログラムが運用されているようです。

- ・ 初期の目的（期待）である、「現状の SCC をどうアレンジすればよいか」につながる（直接的な）問いがなかったように思われますがいかがでしょうか？／よく聞く声に、「自分の生業と MTM 文脈が異なるので没入できない」というものがありますが、例えばその問題の解決法のネタが浮かび上がってくることに期待します。／また、その問題を解決すべきかどうか&それはなぜか、という、さらに上位の問題にもふれていただけるとより付加価値が up すると思います。
- ・ 大分、昔のことなので、残っている印象を中心に答えました。
- ・ SCC でなくても学習できた内容だとは思いますが、SCC は印象的でした。
- ・ 実につらかったが、院生のみんなと話し合うことができて幸せだった。
- ・ S C C は、学習ペースがある程度強制されるため、そのペースにのれることが前提になると思います。就業していない大学生であれば全く問題はありますが、仕事と学業を並行している人に対しては合う、合わないという分岐があるように思われます。シナリオについては成りきれない人、成りきれない人というものもあるようです。文脈が自分の仕事に近いかわ遠いかわという観点のほか、そもそも経験学習的な文脈で学習するのに向く向かないといった適正についても判断できるようになると良いのではないのでしょうか。
- ・ 個人的には S C C はすごいカリキュラムである。これをサービスとして提供するためのパワーが相当に必要であることは確かである。特に業務遂行能力を高める目的をもつ社会人には効果的と考える。
- ・ アンケートのご質問で「一般的な課題云々」という箇所がありましたが、これは「現実の業務上の課題」という解釈で解答させていただきました。もし設問の解釈が間違っておりましたら、ご容赦くださいませ。